

令和7年度

「運営に関する計画」

【最終評価】

大阪市立緑中学校  
令和8年3月

# 令和7年度 大阪市立緑中学校 学校経営の方針

〔グランドデザイン〕

## 学校教育目標

- ①人にやさしい学校・人にやさしい緑中生を育てる。
- ②個性の違いを認め、思いやりのある心を育てる。

「自分も人も大切にする」  
 「自分で考え、自分から動く」  
 「失敗を恐れずチャレンジする」

- ①粘り強く学び続け、努力を惜しまない生徒
- ②思いやりのある言動と行動ができる生徒
- ③自分自身の健康管理をすることができる生徒
- ④どんな状況でもしっかり考え行動できる生徒
- ⑤地域・社会と関わり、たくましく生きていける生徒

## めざす生徒像

- ①授業をはじめとした職務に関するスキルアップに挑戦し続ける教職員
- ②受容・寛容・共感・称賛・激励し、生徒たちに寄りそう豊かな関わりができる教職員
- ③組織で考え、協働できる教職員

## めざす教職員像

- ①自ら考え、意欲的に解決する力を育む学校
- ②思いやる心や感動する心を育む学校
- ③自律的な生活習慣や態度を育む学校
- ④社会の変化に的確に対応できる力を育む学校
- ⑤地域の一員である自覚と感謝する心を育む学校

## めざす学校像

### 方策1 校長経営戦略支援予算

- ◎文化・芸術・音楽に対する知識理解
- ◎好奇心・探求心を育む
- ◎ICT活用
- ◎働き方改革
- ・芸術鑑賞 ・校外体験学習
- ・ICT環境の整備

### 方策2 ブロック化による学校支援事業

- ◎自主学習習慣の確立
- ◎授業改善や指導力向上
- ・学びサポーター等の人材の活用
- ・図書室、学習教室の整備
- ・体力の向上と健康の増進
- ・生徒会活動の活性化
- ・総合的読解力の育成

### 方策3 鶴見区教育関係施策

- ◎外部講師の招へい
- ・性・生教育の推進
- ・特別支援教育
- ・自校通級指導教室
- ・福祉との連携
- ・国際理解 障がい理解 ほか

学習動画コンテンツ  
配信  
モデル校

不登校  
生徒へ  
の支援

生徒の「深い学び」を実現する教育活動の充実  
生徒が「主語」になる教育活動の実現  
生徒が学習者用タブレットを活用し学びを深める教育活動の推進

【令和7年度の研究テーマ】

【学校経営の重点】 ①深い学びおよびわかる授業の質的向上と充実 ②子ども理解と生徒指導の共通理解と校内指導体制の確立 ③健康生活の習慣化、安全管理の徹底、食習慣の定着化 ④家庭、地域、校区小学校等との連携深化と開かれた学校づくり ⑤職員間での情報の共有化（報・連・相）

P T A (保護者)・地域の参画、協働 教育委員会・関係諸機関との連携、支援

- ◎大阪市教育振興基本計画 (R4年度～R7年度) 全市共通目標 → 「運営に関する計画」  
 「安全・安心な教育の推進」「未来を切り拓く学力・体力の向上」「学びを支える教育環境の充実」
- ◎全国学力・学習状況調査と全国体力・運動能力、運動習慣等調査(文科省)の結果
- ◎中央教育審議会答申 (R3.1.26) 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型教育」の姿

【教育方針】 真理と正義を愛し、実行力に富む人間を育成する。

責任を重んじ、勤労を尊び、自主的精神の盛んな人間を育成する。

心身ともに健康で、よく他人と協調して、文化社会を形成する民主的な人間を育成する。

【校訓】 至誠・勤勉・協同

大阪市立緑中学校 令和7年度 運営に関する計画

**【校訓】 至誠・勤勉・協同**

**【教育方針】**

1. 真理と正義を愛し、実行力に富む人間を育成する。
2. 責任を重んじ、勤労を尊び、自主的精神の盛んな人間を育成する。
3. 心身ともに健康で、よく他人と協調して、文化社会を形成する民主的な人間を育成する。

**【学校教育目標】**

1. 人にやさしい学校・人にやさしい緑中生を育てる。
2. 個性の違いを認め、思いやりのある心を育てる。

**【大阪市教育振興基本計画 基本理念】**

- (1) 安全・安心な教育の推進
- (2) 未来を切り拓く学力・体力の向上
- (3) 学びを支える教育環境の充実

**【学校経営の重点】**

1. 「深い学び」および「わかる」授業の質的向上と充実に努める。  
→校内研究授業、学力向上支援チーム事業、学力向上プラン（習熟度授業）  
カリキュラムマネジメント、総合的読解力育成カリキュラム（R7～）  
全国学力・学習状況調査
2. 子ども理解を深め、生徒指導についての共通理解と校内指導体制の確立をはかる。  
→生徒指導研修会、特別支援教育研修会、学年会、職員会議、主任会  
不登校対応、いじめ対策委員会、スクリーニング会議
3. 健康生活の習慣化、安全管理の徹底、食習慣の定着化をはかる。  
→校内研修会、安全に関するマニュアル、ほけんだより、食育だより
4. 家庭、地域、校区小学校、関係機関との連携を深め、開かれた学校づくりの推進をはかる。  
→学校協議会、個人懇談会、学期末懇談会、進路懇談会、進路説明会  
部活動見学会（小中連携）、生徒会児童会交流会（小中連携）  
学校ホームページ、学校説明会（学校選択制）  
オープンスクール（授業参観）、新入生保護者説明会、中高連携
5. 職員間での情報の共有化を務めるために、報告・連絡・相談を密にする。  
→職員会議、企画委員会、学年会、主任会、S K I P連絡掲示板

## 《めざす学校像》

1. 基礎的・基本的な内容の確実な定着と、生徒の活発な意見をもとにした学習活動を充実し、自ら考え、意欲的に解決する力を育む学校。  
→「深い学び」の推進、総合的な学習の時間の充実
2. 豊かな体験的活動を通して、個性を尊重し、互いに支えあう集団の育成を図り、思いやる心や感動する心を育む学校。  
→特別活動の充実、1年校外学習、2年校外学習、3年修学旅行、文化発表会
3. 自らの健康や体力に関心をもち、健康でたくましい心身を養い、自律的な生活習慣や態度を育む学校。  
→性についての学習、食育、体育大会、全国体力・運動能力調査
4. 今日的課題に対応する教育を充実させ、自らの判断で、生きるべき道を選択し、決定するとともに、社会の変化に的確に対応できる力を育む学校。  
→キャリア教育、職業講話、人権についての学習、LGBTQ、平和学習、SDGs  
国際理解学習
5. 地域・保護者の学校支援体制を構築し、家庭や地域の教育力を活かした教育活動を進めるなかで、地域行事への積極的な参加とともに、地域の一員である自覚と感謝する心を育む学校。  
→PTA活動

## 《めざす生徒像》

1. 学力向上および進路実現のために粘り強く学び続け、努力を惜しまない生徒。
2. 他者とのちがいを尊重し、思いやりのある言動と行動ができる生徒。
3. 自分自身の健康の管理を自分で把握でき、体調が悪いときはどのように対応するべきなのかを判断できる生徒。
4. どんな状況でもしっかり考え、行動できる生徒。
5. 自分を取り巻く人や地域・社会と関わり、たくましく生きていける生徒。

## 《令和7年度の研究テーマ》

- ① 生徒の「深い学び」を実現する教育活動の充実
- ② 生徒が「主語」になる教育活動の実現
- ③ 生徒が**学習者用タブレットを活用**し学びを深める教育活動の推進

## 1 学校運営の中期目標

## 現状と課題

**【安全・安心な教育の推進】**

- 本校は「人にやさしい教育を推進し、個性の違いを認め、思いやりの心を育てる」を教育目標に掲げている。学校で子ども一人ひとりが、安心して成長できる学校生活をつくるために、教育相談(各学期初め)やいじめアンケート(毎月)を実施し、生徒教師間の人間関係をつくりながら、情報収集および子ども集団の分析を行っている。情報収集によって認知したいじめについては迅速な解消をはかった。しかしながら、思春期真っ只中の子どもは、自分と他者の違いをもとに、他者を傷つける発言やSNSでトラブル(他者を傷つける言葉や画像の投稿等)を起こしてしまう傾向は続いている。今後も継続して、一人ひとりの価値観や思い、心身の発達などには違いがあること、その違いを尊重することの大事さを理解させ、お互いを大切にする集団の育成をはかっていく。いじめや暴力・暴言行為が起こらない、子ども一人ひとりが大事にされる学校づくりに力を入れる必要性がある。併せて、保護者には、「トラブルを通して子どもの成長をどのようにするか」を学校と連携していく対応をお願いしている。
- 毎月実施している「いじめアンケート」(令和3年度よりスクールライフノートも活用)や各学期はじめの教育相談、相談申告機能などを通じて、認知したいじめについては迅速な解決をはかった。また、アンケート等はいじめ防止の意識向上や生徒の不安・悩みを把握するための情報収集にも大きく寄与した。また、SNSでのトラブル(他者を傷つける言葉や画像の投稿等)は増加傾向にある。道徳の授業や日々の教育活動を通して、思いやりの心や個の違いを認め、お互いを大切にする集団の育成をはかることで、いじめや暴力・暴言のない学校づくりに努める必要がある。必要であれば、業者によるスマホ・ケータイ安全教室を開催し、トラブルを未然に防ぐための知識や心構えをもたせたい。
- いじめは、「いつでも、どの子どもにも、どの学校においても起こり得る」という認識のもと、「学校安心ルール」を活用し、早期発見・早期対応に努めていく。
- 全国的な調査(文部科学省発表)では、小学校から中学校へ就学年数が長くなるほど、不登校の数が増加している。令和3年度の小1と中3を比べると1.3倍である。さらに年度別で見ると、中学1年生で令和3年度と令和1年度に比べて1.3倍である。中学校での不登校の要因をみると、約50%が「無気力・不安」によるもので、次に「友人関係をめぐる問題」(11.5%)、「生活リズムの乱れ、あそび、非行」(11.0%)ある。文部科学省の令和3年度の不登校調査では、小6と中1の不登校生徒の数を比べると1.8倍も増えている。中学校生活は子どもにとって「生きづらい」環境があることがいえる。

- 本校では図書室が不登校生徒の一時的な「安心できる場所」となっている。本校では学校全体で担当スケジュールを組み、多くの教職員が常駐している。また、スクールカウンセラーや子どもサポートネットなどの関係諸機関とも連携をとり、さらには学校スタッフや学校実習の大学生の協力を得て不登校生徒の対応を行っている。学習支援や雑談をとおして、時間をかけて関係をつくり、「無気力・不安」の解消をはかっている。不登校生徒を担当だけで抱え込まない組織的な対応は、教職員の負担軽減につながる。不登校生徒数に劇的な変化は見られないが、不登校をかかえる保護者には信頼できるシステムとなっている。令和5年11月より、給食提供を積極的に行っている。「給食だけでも食べに来ないか？」という声かけも行い、登校する回数を少しずつ増やしている。
- 学期末時点での本校の「不登校」に分類される生徒数を次に表す。

【1学期末】

		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	8	6	7	7	3
	在籍比率	2.7	2.2	2.7	2.4	1.1
2年	人数	24	15	9	6	16
	在籍比率	8.1	5.1	3.3	2.3	5.4
3年	人数	17	32	24	7	7
	在籍比率	6.3	10.7	8.2	2.5	2.7

(「生活指導にかかる調査(1学期)」より)

【2学期末】

		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	—	10	13	11	13
	在籍比率		3.6	5.1	3.8	5.1
2年	人数	—	18	15	11	18
	在籍比率		6.1	5.4	4.3	6.2
3年	人数	—	32	24	12	16
	在籍比率		10.7	8.2	4.3	6.2

(「生活指導にかかる調査(2学期)」より)

- 複数の教職員が不登校生徒に対応することで、複数の視点で不登校生徒一人ひとりにていねいに向き合うことができる。現在行われている図書室での別室登校は、不登校の生徒だけではなく、不登校の子どもをもつ保護者に大きな安心感を与えている。保護者の安心感は子どもに余裕をもって向き合う保護者の態度をつくることは言うまでもない。令和3年度から、学習者用端末を利用したオンライン学習で、自宅にいる不登校の生徒とつながる選択肢もつくっている。これらの人的なサポート、ICTを活用した学習サポート等を活かして不登校の生徒とのつながりを切ることなく、登校に向けた積極的な支援を実施し、不登校の生徒の自立をはかる。令和6年度より生活指導部に「不登校担当」の役職を置き、不登校対応を本格的に取り組んでいく。

- 管理作業部では、学校施設の整備・修理を積極的に行い、令和5年度より下校指導を行っている。事務部でも、各部各学年等の要求にこたえ、学校施設の整備を充実させ、計画的に予算執行を行っている。
- 大阪では、上町断層帯地震や南海トラフ巨大地震等の発生やそれに伴う大規模な災害が懸念されている。災害発生時に「減災」の考え方を踏まえ、危険を回避するために主体的に行動することが求められる。防災・減災教育の計画的・継続的な実施を行い、災害発生時に自ら危険を回避するために、主体的に行動する態度及び安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成をはかる。令和6年度より「危機管理マニュアル」の大幅な見直しを行った。4月には職員研修を行い、共通理解をはかる。
- 本校は、令和4年度に道徳推進拠点校として研究発表を行った。答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進し、事業終了後も実践研究を続けている。

- 特別支援学級数を次に表す。

	R3	R4	R5	R6	R7	R8
人数	37	45	44	37	26	26
学級数	8	9	8	6	5	5
通級指導 教室	—	—	—	1	1	1

- 特別支援学級に在籍する生徒にきめ細やかに対応するため、令和8年度より、「新たな学級編制」へと変更となる。具体的には、障がい種別ごとに生徒数の合計を8で除して算出するのではなく、障がい種別ごとに同学年の生徒で編制することを原則とし、複式学級編制の考え方を適用するものである。市教委からの報告では、比較的規模が大きい学校で特別支援学級数が増加する。
- 特別支援教育は、つまずきがある生徒の価値や能力を高め、自信と希望をもたらす教育である。そのつまずきは「多様性」に富むものであり、だからこそ私たち教師の指導のレパートリーが増えるのだとも言える。生徒たちの自信を支え、中学校生活を一層充実させるためにも、まずは一人ひとりの教師が「多様性があるからこそ学びは深まる」という意識に変わることから始めてみるのが大切ではないだろうか。

## 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

### 《学力向上の取り組み》

#### 【国語】

- 全国調査における国語の平均正答率の全国比および領域別の全国比を次に表す。

	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.03	0.93	1.00	0.96	1.02	1.01
話すこと 聞くこと	1.01	0.92	0.95	0.99	0.99	0.95
書くこと	1.02	0.86	1.05	0.98	1.01	1.05
読むこと	1.05	0.92	0.98	0.94	1.02	1.04

- 大阪府チャレンジテスト（3年、国語）の平均正答率の府比を次に表す。

	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.08	1.03	1.06	1.04	1.06	1.05

- 令和6年度の全国調査の国語の平均正答率は全国水準を保っている。大阪府チャレンジテストでは府平均を大幅に超えている。
- 本校の学習指導は「話すこと・聞くこと」の領域を重点的に行い、学校力UPベース事業を活用してきた。全国調査と大阪府チャレンジテストの結果より、本事業の一定の成果はあると考えるが、来年度は、全国比を上回ることを最大の指標としていきたい。そのためには、中学1年から全国調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。

## 【数学】

- 全国調査における数学の平均正答率の全国比および領域別の全国比を次に表す。

	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.05	0.96	0.97	1.00	0.99	0.97
数と式	1.10	0.91	0.98	1.07	1.02	1.02
図形	1.03	0.94	1.01	0.97	1.01	1.01
関数	1.09	1.00	1.00	0.93	0.98	0.91
データの 活用	1.03	1.02	0.91	1.01	0.97	0.92

- 大阪府チャレンジテスト（対象：3年、数学）の平均正答率の府比を次に表す。

	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.04	1.02	1.03	1.00	1.04	1.00

- 令和6年度の全国調査の数学の平均正答率は全国水準を保っている。大阪府チャレンジテストでは府平均を維持している。
- 全国調査と大阪府チャレンジテストの結果より、数学の基礎基本の学力はあり、本事業の一定の成果はあると考える。令和3年度から全国調査の出題傾向が新しくなった。中学1年から全国調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。

## 【英語】

- 英語では、これまでの知識重視の学力から、知識に「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を加えた統合型の学力が求められるようになった。日ごろの授業では、C-NETの活用、ペアワーク・グループワークなどの学習形態の工夫を行い、主体的なコミュニケーションをはかることを目指している。大阪市英語力調査（GTEC）（対象：中学3年生）を領域別の市比を次に表す。

	R3	R4	R5	R6	R7
読むこと	1.07	1.02	1.03	1.02	0.99
聞くこと	1.03	0.98	1.04	1.01	1.00
書くこと	1.07	1.02	1.12	1.00	0.96
話すこと	1.00	1.00	1.07	1.01	0.97

- 大阪府チャレンジテスト（対象：3年、英語）の平均正答率の府比を次に表す。

	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.02	1.04	1.04	1.07	0.99	1.02

- 英語の基礎基本の学力はあり、本事業の一定の成果はあると考える。中学1年から大阪市英語力調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。
- CEFRA1レベル（英検3級程度）相当以上の英語力を有する中学3年生の割合

	R3	R4	R5	R6	R7
学校	59.8	59.2	64.2	60.4	58.9
大阪市	52.6	55.8	54.3	57.5	60.3

※大阪市では、GTECのトータルスコアの440点以上をCEFR・A1レベル相当以上としている。

### 【無回答率】

- 最後に、全国調査の国語と数学の無回答率を次に表す。

(国語)

無回答率(%)	R1	R3	R4	R5	R6	R7
本校	3.2	6.7	5.8	4.8	4.0	6.4
全国	2.6	4.4	4.3	4.6	3.9	6.7

(数学)

無回答率(%)	R1	R3	R4	R5	R6	R7
本校	7.4	14.2	12.3	9.5	12.8	11.2
全国	7.3	11.2	10.8	9.6	11.3	10.6

- 令和7年度から実施の「総合的読解力」を中心に課題解決学習を展開し、「話し合い活動」「表現活動」を充実させ、「読解力」「思考力」「表現力」をつける。課題解決学習の取り組みにおいて培った「答えのない課題に対して、粘り強くあきらめない態度」は、「難しい課題にチャレンジする態度」につながる。このことは今後、無回答率の低さに現れることが期待される。

## 《体力の向上》

- 本校は、部活動の参加率が9割近い。コロナ禍において、部活動や保健体育の授業内容、体育大会の内容が制限され、体力不足も懸念される。筋力トレーニングは、各自で行うことができるが、柔軟性を高めるストレッチングは、多少の専門性を必要とする。保健体育科の授業では、「柔軟性を活かした身体づくり」に力を入れ、体力向上だけではなく、免疫力の向上をねらっている。
- 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の実技の全国比を次に表す。

### 【男子】

	R3	R4	R5	R6	R7
握力	1.05	1.00	0.97	0.92	1.00
上体起こし	1.12	1.15	1.04	1.15	1.04
長座体前屈	1.01	1.07	0.98	1.02	0.90
反復横とび	1.08	1.08	1.07	1.08	1.00
持久走	—	—	—	—	—
20m シャトルラン	1.06	1.09	1.11	1.09	1.04
<b>50m 走</b>	<b>1.01</b>	<b>1.00</b>	<b>0.99</b>	<b>0.97</b>	<b>1.04</b>
立ち幅とび	1.00	1.04	1.03	1.01	0.98
ハンドボール投げ	1.02	0.96	1.04	1.00	0.97
体力合計点	1.08	1.08	1.05	1.08	0.96

※ 50m 走は 1.00 より小さければ全国平均よりも速く、大きければ遅いことを示す。(タイムは小さいほど早いため) 50m 走の表示例：全国比 0.98 (全国平均より約 2%**速い**)

### 【女子】

	R3	R4	R5	R6	R7
握力	0.98	0.95	1.01	0.94	1.01
上体起こし	1.00	1.12	1.08	1.15	1.05
長座体前屈	0.99	0.98	0.99	0.99	1.03
反復横とび	1.00	1.06	1.01	0.99	0.98
持久走	—	—	—	—	—
20m シャトルラン	0.94	1.01	1.06	1.05	1.07
<b>50m 走</b>	<b>1.04</b>	<b>1.01</b>	<b>0.99</b>	<b>0.99</b>	<b>1.04</b>
立ち幅とび	0.96	1.03	1.00	0.99	0.98
ハンドボール投げ	0.87	1.01	0.92	0.89	0.89
体力合計点	0.94	1.03	1.02	0.99	0.97

- 令和6年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の実技の結果では、男子は8種目のうち、(7)種目(R5:6種目、R4:6種目、R3:7種目)が全国平均を上回っていた。令和6年度の同調査で、女子は8種目のうち(3)種目(R5:6種目、R4:5種目、R3:1種目)が全国平均を上回っていた。

- 前述したように、本校は「柔軟性を活かした身体づくり」に力を入れている。柔軟性は筋肉と腱が伸びる能力のことで、競技パフォーマンスの向上に限らず、障害予防や体力向上などにも関係する。本校では「課題に応じた教育活動推進事業」を活用し、平成26年度から令和6年度にわたって、体操競技が専門の講師が継続して配置されている。その専門分野を活かした「柔軟性を活かした身体づくり」の理論や授業実践などは、保健体育科の指導の手本になっている。
- 令和6年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の生徒質問項目における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか。」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する生徒の割合を次に表す。本校では、「課題に応じた教育活動推進事業」で市費常勤講師の配置（保健体育、TTの指導）をしていただき、きめ細かい指導を継続している。令和7年度もTTによる指導効果を上げ、「運動やスポーツすることが好き」という生徒を増やしていく。

		R3	R4	R5	R6	R7
男子	学校	53.6	61.9	63.2	79.6	72.0
	全国	60.6	62.1	63.4	63.5	66.4
女子	学校	34.9	45.2	33.1	53.5	45.3
	全国	43.0	44.2	43.1	43.2	43.0

- 男子と比較して女子の全国平均を上回る種目が少ない。女子の運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツに対する意識は、全国平均より低かったが、今年度は改善した。今後も継続して取り組んでいく。生涯教育を見据え、中学卒業後も自ら健康管理や体力向上を実践できる生徒の育成を行う。
- 令和6年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の生徒質問項目における「1週間の総運動時間が60分未満の生徒の割合」を次に表す。

		R3	R4	R5	R6	R7
男子	学校	10.2	12.2	13.0	6.8	10.7
	全国	7.4	7、8	11.0	9.2	9.4
女子	学校	32.0	20.5	26.3	31.0	27.7
	全国	17.8	17.9	24.9	21.4	21.4

- 定期的に発行される「給食だより」では食事による健康管理、「ほけんだより」では基本的な生活習慣の維持による健康管理を、生徒や保護者に伝えてきた。学校ホームページでは、給食のメニューの紹介だけに終わらず、季節の食べ物の紹介、生産者や調理員の思いを給食時間の校内放送でも伝えた。保健室は、感染症対策を行いながらの体調不良や怪我をした生徒への対応を行い、各種検診も行った。担当者による安定した食育指導や保健指導により、安心して教育活動が行うことができている。令和6年度より、自己除去が廃止となった。令和7年度も継続して、食物アレルギーに対する理解を教職員並びに保護者とも深め、取り組んでいく。

## 【学びを支える教育環境の充実】

### 《ICTの活用と推進》

- 「深い理解」よりも「とりあえずテストで点をとれるテクニックを教えてしまう」傾向が強くなってきているのではないだろうか。学習は、わからなかったり、できなかったりしたことが、様々な試行錯誤や他者からのアドバイスにより、わかったり、できるようになるという主体的な体験をともなう。「わかった」「できた」という体験は「喜び」をともない、その「喜び」がさらに学習を進めていくモチベーションになっていく。「テクニック」の傾向が強くなると、モチベーションが失われ、知的好奇心が失われていく。その結果、何とか理解してもらおうと一生懸命説明しても「長い説明はいいからやり方だけ教えて」という残念な反応が返ってくる。いかに「学ぶ喜び」を感じられる授業実践をつくることができるかが鍵となる。

### 《働き方改革》

- そのような学びを支援する環境づくりとして、令和4年度からICT機器の活用と整備、教職員の長時間勤務の解消を掲げた。学級担任の業務の軽減をはかるために、副担任をはじめとする全職員に業務を分散している。具体的には、朝と帰りの学活、給食指導、学級活動、道徳の授業を担当だけではなく、副担任もふくめて複数で担当することである。これにより業務が減るだけではなく、精神的な余裕がでてくる。私的な用事（育児、介護、通院、旅行、趣味など）で休暇をとることへのハードルも低くなる。肉体的・精神的な余裕は、次への活力となり、好循環を生み出す。教職員には、業務を全員で取り組むことで、職場に好循環が生み出されることを引き続き理解させていく。「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1および基準2を満たす9月の教員の割合を次に表す。

	R3	R4	R5	R6	R7
基準1	34.48	27.12	31.58	42.59	42.64
基準2	63.79	52.54	73.68	75.93	92.73

#### 【基準1】

次のア及びイの基準を満たすこと

- ア 1か月の時間外勤務時間が45時間を超えないようにすること
- イ 1年間の時間外勤務時間が360時間を超えないようにすること

#### 【基準2】

基準1を原則としつつ、基準1を超えて勤務する場合においても、次のアからエまでの基準を満たすこと

- ア 1年間の時間外勤務時間が720時間を超えないようにすること
- イ 1か月の時間外勤務時間が45時間を超える月を1年間に6月までとすること

ウ 1か月の時間外勤務時間が100時間を超えないようにすること

エ 連続する複数月（2か月、3か月、4か月、5か月、6か月）のそれぞれの期間について、時間外勤務時間の1か月当たりの平均が80時間を超えないようにすること

- 教職員の長時間勤務の解消を通じ、教員が子どもたちの前で健康で生き生きと働くことができ、子どもたち一人ひとりに向き合う時間を確保することを目指す。さらには、教科の専門性を活かす、そしてその専門性を伸ばす学びを教員一人ひとりに求め、互いの教育実践を交流できる働きがいのある職場環境をつくっていく。令和5年度より、校内研究授業を各学年での実施を再開した。一方、管理作業部、事務部、会計年度職員、サポーターはその教育活動を陰ながら支援していく。
- 令和5年4月、校長は学校グランドデザイン（【学校教育目標】【学校経営の重点】【目指す学校像】【目指す生徒像】）を示し、教職員で共有し、教育活動を推進した。令和5年12月に令和6年度に向けて、学校のすべての業務を見直すために、教職員対象に「業務に関するアンケート」を実施した。令和6年度の評価をもとに、令和7年度の学校運営に活かしていく。
- 令和5年4月、校長は【学校教育目標】【学校経営の重点】【目指す学校像】【目指す生徒像】を示し、教職員で共有し、教育活動を推進した。令和5年度末から毎年度、次年度に向けて、学校のすべての業務を見直すために、「教職員人事に関するアンケート」を実施している。回答結果や自己評価（目標別シート）を吟味し、次年度の学校運営に活かしていく。令和6年4月に学校経営計画（グランドデザイン）を検討する研修会を行い、本校がめざす「こども像」の実現に向けて共通理解をはかった。年度目標の実現に向けて、「校長経営戦略予算」「ブロック化による学校支援事業」「鶴見区教育活動サポート事業」の予算を活用していく。
- 本校では仕事の軽減策として、職員朝会の回数削減、職員会議資料のペーパーレス化、部活動指導員の活用、学びサポーターによる学習支援、特別支援サポーターによる自立支援、学校司書と学校元気アップ事業による図書館運営、大学（大阪教育大学、大阪成蹊大学など）の学生および大阪市教員養成講座による現場実習を兼ねた学習支援、鶴見区役所による事業の学習支援、欠席連絡アプリの導入、テスト採点システムの導入などを行っている。また、学級担任の業務の負担軽減策として、給食指導・学級活動・懇談会・道徳の授業などに副担任が積極的に参加して対応してもらっている。これらの参加により、副担任と学級のつながりが深められる。複数の目で生徒一人ひとりを見ることは、子ども理解を深めることにおいても利点がある。また、学級での複数による指導を通して、中堅教員やベテラン教員と若手教員の教育実践の交流が生まれてくることが期待される。
- 令和6年度より、学校の組織図を一新し、教員一人ひとりの業務に対する意識を高めている。さらには、毎年度末に「運営に関する計画（最終反省）」「学校協議会の評価結果」をもとに、学校の校務分掌を見直し、業務の偏りを修正しつつ、学校の課題を効果的に解消していく。

- 毎月実施される学校安全衛生委員会では、職員の健康維持や職場環境の改善について意見交流を行っている。長時間勤務の把握や定期健康診断の結果、ストレスチェックの結果については、産業医の意見をもとに職場環境の改善をはかっている。
- 本校は職員数が多いので、一部の職員に業務が集中することを避けるために、職員全員が自覚して少しずつ業務を引き受け、教育活動を進めていくことを年度初めに確認している。これらの取り組みにより、職員全員に精神的な余裕ができ、長時間勤務の解消につながると考えている。

## 中期目標

### 【安全・安心な教育の推進】

- 令和7年度の年度末の校内調査（生徒）における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を90%以上にする。
- 毎年度末の校内調査において、不登校生徒の在籍比率を、毎年、前年度より減少させる。
- 毎年度末の校内調査において、前年度不登校生徒の改善の割合を、毎年、増加させる。
- 令和7年度の年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、対応した割合を100%にし、解消した割合を95%以上にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査における「学校のきまり（規則）を守っていますか」に対して、肯定的な「守っている」と回答する割合を生徒は95%以上、保護者は90%以上にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査（保護者）における「学校は安全対策（防災、事故、熱中症、感染症、疾病、不審者への対応策）に努めていますか」に対して、肯定的な「努めている」と回答する割合を90%にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査（保護者）において、「学校の様子は学校HPや通信等によくわかりますか」に対して、肯定的な「よくわかる」と回答する割合を90%以上にする。
- 防災・減災教育の計画的・継続的な実施を行い、災害発生時に自ら危険を回避するために、主体的に行動する態度及び安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成をはかる。
- 答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進する。
- 文化・芸術・音楽に対する知識理解を深め、感性を高めるための機会を毎年1回以上つくる。
- 地域連携の取り組みや多様な体験学習により、生徒の好奇心や探求心を育み、魅力ある学校づくりを推進する。
- 特別支援学級の自立支援及び学習支援の環境整備を行う。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 令和7年度の年度末の校内調査における「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する生徒の割合を80%以上にする。
- 令和7年度の大阪市英語力調査におけるCEFR A1レベル（英検3級）相当以上の英語力を有する中学3年生の割合（4技能）を60%以上にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する生徒の割合を80%以上にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査（生徒）における「学校の授業はわかりやすいですか」に対して、肯定的な「わかりやすい」と回答する割合を80%以上にする。
- 令和7年度の年度末の校内調査（生徒）における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的な「取り組んでいる」と回答する割合を80%以上にする。

**【学びを支える教育環境の充実】**

- 令和7年度の授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。ただし、学校行事などICT活用が適さない日数を除く。
- 令和7年度の「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1と基準2を満たす教員の割合をそれぞれ28%、45%以上にする。

## 【安全・安心な教育の推進】

- 年度末の校内調査において、不登校生徒の在籍比率を前年度より減少させる。【施策 1-2-6】
- 年度末の校内調査において、前年度不登校生徒の改善の割合を増加させる。【施策 1-2-7】
- 年度末の校内調査において、「学校の規則やきまりを守っていますか」に対して、肯定的な「守っている」と回答する割合を生徒は **97** %以上、保護者は **90** %以上にする。【施策 1-3-8】
- 年度末の校内調査（生徒）における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を **84** %以上にする。【施策 1-1-1】
- 年度末の校内調査（生徒）における「将来の夢や目標をもっていますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を **80** %以上にする。【施策 2-2-11】
- 年度末の校内調査（生徒）における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を **97** %以上にする。【施策 2】
- 年度末の校内調査（生徒）における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を **87** %以上にする。【施策 1】
- 年度末の校内調査（生徒）における「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を **82** %以上にする。【施策 2】

### 学校独自の目標

- 年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、対応した割合を **100** %にし、解消した割合を **95** %以上にする。
- 年度末の校内調査（生徒）における「**緑中学校『情報モラルチェック』**を活用し、スマホの危険性や使い方について理解していますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を **80** %以上にする。【施策 1-6-10(関連)】
- 年度末の校内調査（保護者）における「学校は安全対策に努めていますか」に対して、肯定的な「努めている」と回答する割合を **90** %にする。
- 年度末の校内調査（保護者）において、「学校の様子はHPや通信等でよくわかりますか」に対して、肯定的な「よくわかる」と回答する割合を **90** %以上にする。
- 防災・減災教育の計画的・継続的な実施を行い、災害発生時に自ら危険を回避するために、主体的に行動する態度及び安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成をはかる。
- 答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進する。
- 文化・芸術・音楽に対する知識理解を深め、感性を高めるための機会を年に1回以上つくる。
- 地域連携の取り組みや多様な体験学習により、生徒の好奇心や探求心を育み、魅力ある学校づくりを推進する。
- 特別支援学級および**自校通級指導教室**の自立支援及び学習支援の環境整備を行う。

## 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 大阪市英語力調査における C E F R A 1 レベル (英検 3 級) 相当以上の英語力を有する中学 3 年生の割合 (4 技能) を 60 % 以上にする。【施策 4】
- 年度末の校内調査における「運動 (体を動かす遊びを含む) やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も 肯定的な「好き」を回答する生徒の割合を 45 % 以上にする。【施策 5-1-16】
- 年度末の校内調査 (生徒) における「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も 肯定的な「当てはまる」と回答する割合を ( 45 ) % 以上にする。【施策 4-2-13】
- 年度末の校内調査 (生徒) における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的に回答する割合を ( 93 ) % 以上にする。【施策 5-2-18】
- 年度末の校内調査 (生徒) における「毎日、同じくらいの時刻に寝て、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して、肯定的に回答する割合を ( 87 ) % 以上にする。【施策 5-2-18】

### 学校独自の目標

- 「読解力」の育成を推進する。
- 校内研究授業を年 3 回 (各学年 1 回) 実施し、「主体的な深い学び」についての研究を行う。
- 年度末の校内調査における「学校の授業はわかりやすいですか」に対して、肯定的な「わかりやすい」と回答する生徒の割合を 90 % 以上にする。
- 年度末の校内調査 (生徒) における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的な「取り組んでいる」と回答する割合を 70 % 以上にする。

## 【学びを支える教育環境の充実】

- 授業日において、生徒の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 50 % 以上にする。ただし、学校行事など I C T 活用が適さない日数を除く。【施策 6】
- 「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 1 と基準 2 を満たす教員の割合をそれぞれ 30 %、60 % 以上にする。【施策 7】

### 学校独自の目標

- 感染症による臨時休業や登校不安、不登校生徒の学びの保障として、自宅でのオンライン学習の環境整備を行い、オンラインでの授業実践の研究を行う。
- 学習者用端末およびルータの管理 (定期的な台数調査、修理依頼など) を徹底する。

## 【中期目標】

- 中期目標の【安全・安心な教育の推進】【未来を切り拓く学力・体力の向上】【学びを支える教育環境の充実】の各目標において、概ね目標を達成することができた。詳細については、目標別シート（様式2）の「中期目標及び年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析」にまとめた。

## 【安全・安心な教育の推進】

- 学校には、「いじめ防止対策推進法」に基づき、すべての生徒が安全に教育を受けられる環境づくりが法律で義務付けられている。本校では、①「**心理的安全性**」が高い学級集団づくり、②組織的対応を行っている。
- 本校では学校グランドデザインに「子どもが『主語』になる教育活動の推進」を掲げている。子どもが主体的になるには、「**誰もがありのままの自分でいることができ、恐れず何にでも挑戦できる環境づくり**」が必要であると考えている。これは「心理的に安全な状態」であり、心理学では「心理的安全性」と言われる。

「失敗したらみんなに責められるのではないか…」

「間違うとみんなから笑われるのではないか…」

「違う考えや反対意見を言うと否定されるのではないか…」

「学校を休むと周りから理由を問い詰められるのではないか…」

このような不安をもちながらの学校生活は、いじめや不登校、学ぶ意欲の喪失の原因につながることは自明である。

- 家庭での「心理的安全性」も必要である。「心理的安全性」の低い家庭環境は、過保護・過干渉、過度な期待、夫婦喧嘩、条件付きの愛情、感情的な叱責等による心理的虐待、暴力による身体的虐待の特徴がある。一方、「心理的安全性」の高い家庭環境は、子どもの自己肯定感、自立心、コミュニケーション能力、ストレスへの抵抗力が高い特徴がある。学校での生活指導においては、子どものトラブルの事象だけではなく、家庭環境や成育歴などの背景、子どもの特性も理解しながら指導していくことが求められる。
- 組織的対応の一つに定期的なアンケートがある。毎月実施している「いじめアンケート」（令和3年度よりスクールライフノートを活用）や各学期はじめの「教育相談」、「相談申告機能」（スクールライフノート機能）などを通じて、認知したいじめについては迅速な解消を図った。また、アンケート等はいじめ防止の意識向上や生徒の不安・悩みを把握するための情報収集にも大きく寄与した。しかしながら、「心の天気」（スクールライフノート機能）の活用

が極めて低く、課題であった。令和7年2月より「心の天気」の入力を推進する取り組みを開始した。また、先生や学校カウンセラーに日常的に「ちょっとしたこと」を相談できる雰囲気づくりを大事にしている。

- 週1回、生徒指導委員会を開催し、各学年のトラブルへの対応を協議している。毎日、朝の学年打ち合わせでは、気になる生徒の情報交換を行っている。
- SNSトラブル（他者を傷つける言葉や画像の投稿等）は増加傾向にある。その背景要因は①心理的・発達的な要因、②デジタルリテラシーと認識の不足、③社会的・環境的要因が挙げられる。
- 【心理的・発達的な要因】思春期の子どもは、周囲から認められたいという気持ちが強く、目立つための不適切な投稿や、いいね・フォロワー数を過度に気にする傾向がある。また、非言語情報（表情や声のトーン）が伝わらないSNSでは、言葉足らずの表現の誤解からトラブル（既読無視の連鎖など）に発展しやすくなる。自制心が未発達のため、強い好奇心や衝動性を抑えられず、ネット上の誘惑や攻撃的な言動に走りやすくなる。
- 【デジタルリテラシーと認識の不足】SNSは「仲間内だけ」という誤解があり、投稿が特定の友人にしか見られていないと思込み、個人情報の流出や誹謗中傷を安易に行ってしまうことがある。また、情報の拡散性を不可逆性の無理解があり、一度拡散した情報は完全に削除することが困難（デジタルタトゥー）であるというリスク認識が不足している。
- 【社会的・環境的要因】匿名性と加害の心理により、相手の顔が見えず匿名性が高いことで、罪悪感を持たずに攻撃してしまい、いじめが陰湿化・エスカレートしやすい環境にある。また、居場所の欠如と孤独感により、現実世界での人間関係がうまくいかない場合、SNSに過度に依存し、知らない相手との接触から犯罪被害に遭うリスクが高まる。特に、中学生ではクラスや部活動のLINEグループなど「逃げ場のない閉鎖的なコミュニティ」でのトラブルが深刻化しやすいことが特徴である。
- これらの分析により、学校では道徳の授業や日々の教育活動を通して、思いやりの心や個のちがいを認め、お互いを大切に作る集団の育成をはかることで、現実世界でのいじめや暴言・暴力のない学校づくりに努めている。ネット上のSNS空間対策として、不定期であるが、通信業者によるスマホ・ケータイ安全教室を開催し、トラブルを未然に防ぐための知識や心構えをもたせている。令和7年4月より「情報モラルチェック」を生徒と保護者対象に実施し、SNSトラブルが起こりにくい環境をつくる取り組みを行っている。

- 年度末の校内調査（生徒）における「学校のきまり・規則を守っている」および「授業中、勉強する雰囲気ができる」に対しての肯定的意見の割合を次に表す。

	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7
きまりを守る	-	-	99	98	98	97.6	97.3
学習する雰囲気	54	69	71	80	75	73.6	74.3

結果より、現在も学校が落ち着いた環境であることを表している。教科担任は同じ教材でも学級の実態に合わせて、教え方を工夫し、授業実践を行っている。すべては教科担任の日々の授業に対する強い思いや惜しみない努力によるものと確信する。

- コロナ禍を経て、令和5年度から校内研究授業を復活している。現行の学習指導要領では、授業の主体が教師の「教え方」から生徒の「学び方」に大転換した。令和6年度からの研究テーマとして、「生徒の『深い**学び**』を実現する教育活動の充実」を掲げた。令和7年度は、「生徒が学習者用タブレットを活用し学びを深める教育活動の推進」を追加し、生徒の端末活用率の向上をねらった。生徒による授業アンケートにも、生徒の端末活用についての質問項目を入れた。令和8年度は「生徒が主体」であることを授業だけではなく、学校行事、特別活動（学級活動）や総合的な学習の時間、生活指導へと広げていく。
- 全国的な調査（文部科学省発表）では、小学校から中学校へ就学年数が長くなるほど、不登校の数が増加している。令和3年度の小1と中3を比べると1.3倍である。さらに年度別で見ると、中学1年生で令和3年度と令和1年度に比べて1.3倍である。中学校での不登校の要因をみると、約50%が「無気力・不安」によるもので、次に「友人関係をめぐる問題」（11.5%）、「生活リズムの乱れ、あそび、非行」（11.0%）ある。しかしながら、学校と生徒では不登校の要因によっては差があることも注視しなければならない。特に「教職員への反抗・反発」「教職員とのトラブル・叱責等」については、学校側の問題であるので、子ども理解の研修を積み重ね、学校の「マルチリートメント」を解消していきたい。

※ マルトリートメント…児童虐待とは言い切れなくても、子どもの発達を阻害する、大人から子どもへの不適切な関わり。→脳の発達に影響を与える

## きっかけ要因に関する教師・児童生徒・保護者の回答の比較

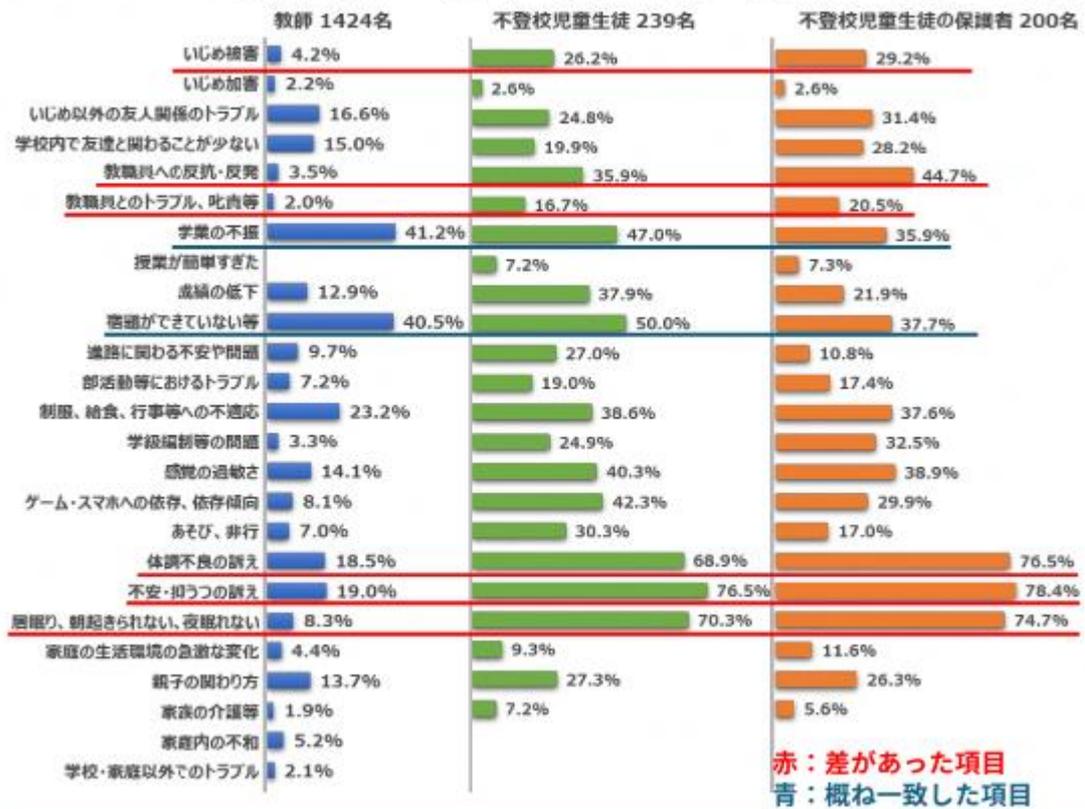


図 「文部科学省委託事業 不登校の要因分析に関する調査研究」（2023年）  
子どもの発達化学研究所より

- 本校では図書室が不登校生徒の一時的な「安心できる場所」（不登校生徒にとって心理的安全性が高い場所）となっている。本校では学校全体で担当スケジュールを組み、多くの教職員が常駐している。また、スクールカウンセラーやこどもサポートネットなどの関係諸機関とも連携をとり、さらには学校スタッフや学校実習の大学生の協力を得て不登校生徒の対応を行っている。学習支援や雑談をとおして、時間をかけて関係をつくり、「不安」の解消をはかっている。不登校生徒を担当だけで抱え込まない組織的な対応は、教職員の負担軽減につながる。不登校生徒数に劇的な変化は見られないが、不登校をかかえる保護者には信頼できるシステムとなっている。令和5年11月より、給食提供を積極的に行っている。「給食だけでも食べに来ないか？」という声かけも行い、登校する回数を少しずつ増やしている。
- 学期末時点での本校の「不登校」に分類される生徒数を次に表す。文部科学省の令和3年度の不登校調査では、小6と中1の不登校生徒の数を比べると1.8倍も増えている。中学校生活は子どもにとって「生きづらい」環境があることがいえる。

【1学期末】

		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	8	6	7	7	3
	在籍比率	2.7	2.2	2.7	2.4	1.1
2年	人数	24	15	9	6	16
	在籍比率	8.1	5.1	3.3	2.3	5.4
3年	人数	17	32	24	7	7
	在籍比率	6.3	10.7	8.2	2.5	2.7

(「生活指導にかかる調査(1学期)」より)

【2学期末】

		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	—	10	13	11	13
	在籍比率		3.6	5.1	3.8	5.1
2年	人数	—	18	15	11	18
	在籍比率		6.1	5.4	4.3	6.2
3年	人数	—	32	24	12	16
	在籍比率		10.7	8.2	4.3	6.2

(「生活指導にかかる調査(2学期)」より)

- 複数の教職員が不登校生徒に対応することで、複数の視点で不登校生徒一人ひとりにていねいに向き合うことができる。現在行われている図書室での別室登校は、不登校の生徒だけではなく、不登校の子どもをもつ保護者に大きな安心感を与えている。保護者の安心感は子どもに余裕をもって向き合う保護者の態度をつくることは言うまでもない。令和3年度から、学習者用端末を利用したオンライン学習で学力保障を行いつつ、自宅にいる不登校の生徒とつながる選択肢もつくっている。これらの人的なサポート、ICTを活用した学習サポート等を活かして不登校の生徒とのつながりを切ることなく、登校に向けた積極的な支援を実施し、不登校の生徒の自立をはかる。将来、生徒数の減少により、空き教室が確保できれば、校内フリースクールの設置も検討していく。
- 管理作業部では、学校施設の整備・修理を積極的に行い、令和5年度より下校指導で生徒への声掛けを行っている。事務部でも、各部各学年等の要求にこたえ、学校施設の整備を充実させ、計画的に予算執行を行っている。

## 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

### 《学力の向上》

- 学力向上には「心理的安全性」が必要不可欠である。授業で安心して発言できるため、自分から行動し、学習に積極的に取り組み、主体性が向上する。意見をさらけ出せる環境では、新しいアイデアが生まれやすく、学びが深まるような創造的な学習をつくることができる。間違いを恥じる必要がないため、挑戦を繰り返し、問題解決能力が向上する。心理学的に、恐怖や不安がない状態は、脳が情報を記憶しやすくなる。
- 次に、学習者の心理的安全性を高め、学力を伸ばす段階を考える。心理的安全性が確保された環境は、子どもの自己肯定感を育み、学習における「楽しさ」や「好奇心」を最大限に引き出す前提条件となる。
  - ① 否定せず最後まで聞く  
子どもの発言や質問に対し、「そんなことも分からないの」と遮らず、最後まで相槌を打ちながら聴く。
  - ② 発言・挑戦を褒める  
結果や点数だけでなく、質問したことや、難しい問題に挑戦したプロセスを称賛する。  
例：「それいいね」「よく気づいたね」
  - ③ 間違いを「成長のチャンス」にする  
誤答を「間違い」として指摘するのではなく、「ここをこうすればもっと良くなる」と前向きにフィードバックする。
  - ④ 他者と比較しない  
過去の自分と比較し、成長した部分に焦点を当てる。
- 学習者一人ひとりの学習到達度に合わせて学習支援（少人数による習熟度別の学習指導）を行うことは極めて効果的である。全国学力学習状況調査（以下、「全国調査」）における全国（公立）の生徒全員の正答分布の状況から高い順に、概ね25%区切りで、区分Ⅰ、区分Ⅱ、区分Ⅲ、区分Ⅳの4つに分けたとき、区分Ⅳの割合を「学力に課題の見られる生徒の割合」とした場合、学力に課題の見られるすべての生徒（区分Ⅳ）へのきめ細かで継続した指導・支援を行い、生徒の学力向上をはかることは、「誰一人取り残さない学力向上」に向けて重要な視点である。大阪市教育振興基本計画では、区分Ⅳの割合を「学力に課題の見られる児童生徒の割合」とし、全国水準とすることを施策目標としている。

#### （国語の区分Ⅳ）

	R3	R4	R5	R6	R7
本校	25.8	21.4	25.9	18.3	21.3
全国	18.7	21.4	19.4	18.9	25.1

#### （数学の区分Ⅳ）

	R3	R4	R5	R6	R7
本校	22.2	16.9	16.0	19.4	24.6
全国	18.6	19.0	17.6	20.3	23.8

- 学力不振が不登校や非行問題につながる原因になることもある。学力向上委員会を中心とした組織的な取り組みが必要である。
- 令和4年度からの新規事業「学力向上支援チーム事業」において、本校は基本支援を受けることになった。また効果検証対象教科（R4～R6）を国語に指定し、スクールアドバイザーからいねいな支援をいただいている。今後、従来の「学校力UPベース事業」と「課題に応じた教育活動推進事業」、そして「学力向上支援チーム事業」の3つの事業が、本校の学力向上にどのようにかかわっていくかを学力向上委員会を中心に本校の教育課程をデザイン（カリキュラム・マネジメント）していく必要がある。
- 国語と数学においては、全国の公立学校を対象に年1回実施される全国学力・学習状況調査（対象：中学3年生）（以下、全国調査）の結果を、英語においては大阪市英語力調査（GTEC）を、学校力UPベース事業（中学1年活から中学3年生への継続した習熟度別少人数授業）の集大成と位置づけ、校内で定期的実施される定期テストや実力テストはその集大成までの通過点としての検証材料としている。
- 国語（「(ことばを) 聞く力」「(ことばを) 話す力」「(ことばを) 読む力」「(ことばを) 書く力」を育てる教科）は、すべての教科の学習の中で基本となる教科である。文章を正しく読む力がなければ、何を教えてもその生徒の理解は深まっていけない。したがって、国語の分析を行うことは、結果的にはすべての教科の学力向上につながるものであると考えている。中学1年から2年、3年に進級するに伴い、すべての教科において学習内容が高度化し、授業や教科書を理解するには「ことば」で理解することが求められる。つまり、数学や英語をはじめとするすべての教科内容の理解を進めるには、複雑な「ことば」の理解（国語の理解の深化）を要する。
- 学力向上委員会では、「プールで泳げるようになるためには、先にプールに水を溜めなければならない」と考えている。水にあたるのが語彙や文型、話し言葉が豊かになれば、書き言葉も上達する。本校では、全学年を対象に「朝の読書活動」を推進し、読書によって語彙や文型を学び、書き言葉が上達することをねらっている。
- 令和3年度からの全国調査の国語の記述問題を「解答する」には、「読解力」「思考力」「表現力」が必要とされる。ここで、それぞれの力は、次のような内容で説明される。

「読解力」…問題の意味を理解する

「思考力」…自分の考えをもつ

「表現力」…条件に合わせ、自分の考えを正しく伝えるように書く

全国調査の平均正答率を上げるには、学習時間を増やし、全国調査の直前に過去問演習を訓練すればいいという単純なものではなく、前述した解答に必要な力を、日々の授業や定期テストでどのようにつけていくかを分析し、実践していくことが必要である。

- 令和7年度から「総合的読解力」を実施する。複雑な課題に向き合うとき、読解力が必要である。また、コロナ禍で対面型の交流が減少し、社会性が低下していると言える。例えば、「顔色から相手の気持ちを推し量る」「体調をみる」「場の空気を読む」ことが困難であることだ。社会性の低下は、国語における次の4つの観点にもその影響がある。

「聞く力」…話し相手の主張だけではない思い・真意を感じ取れない

「話す力」…発音や態度などを相手・場面に応じてコントロールできない

「読む力」…文学的な文章において感情を読み取れない

「書く力」…伝統的形式・書式に従った文章を書けない

- 日常生活において、「人の言っていることがわからない」、「こちらの思いが伝わらない」ことは、コミュニケーションをとることに問題が生じる。言ってもいないのに間違っ相手にとらえられ、その言い訳や釈明も通じない。その結果、トラブルに発展することは自明である。読解力の取り組みは生徒指導の観点からも急務である。

## 【国語】

- 全国調査における国語の平均正答率の全国比および領域別の全国比を次に表す。

国語	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.03	0.93	1.00	0.96	1.02	1.01
話すこと 聞くこと	1.01	0.92	0.95	0.99	0.99	0.95
書くこと	1.02	0.86	1.05	0.98	1.01	1.05
読むこと	1.05	0.92	0.98	0.94	1.02	1.04

- 大阪府チャレンジテスト（3年、国語）の平均正答率の府比を次に表す。

国語	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均 正答率	1.08	1.03	1.06	1.04	1.06	1.05

- 令和7年度の全国調査の国語の平均正答率は全国水準を保っている。大阪府チャレンジテストでは府平均を大幅に超えている。
- 本校の学習指導は「話すこと・聞くこと」の領域を重点的に行い、学校力UPベース事業を活用してきた。全国調査と大阪府チャレンジテストの結果より、本事業の一定の成果はあると考えるが、来年度は、全国比を上回ることを最大の指標としていきたい。そのためには、中学1年から全国調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。

## 【数学】

- 全国調査における数学の平均正答率の全国比および領域別の全国比を次に表す。

数学	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均正答率	1.05	0.96	0.97	1.00	0.99	0.97
数と式	1.10	0.91	0.98	1.07	1.02	1.02
図形	1.03	0.94	1.01	0.97	1.01	1.01
関数	1.09	1.00	1.00	0.93	0.98	0.91
データの活用	1.03	1.02	0.91	1.01	0.97	0.92

- 大阪府チャレンジテスト（対象：3年、数学）の平均正答率の府比を次に表す。

数学	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均正答率	1.04	1.02	1.03	1.00	1.04	1.00

- 令和7年度の全国調査の数学の平均正答率は全国水準を保っている。大阪府チャレンジテストでは府平均を維持している。
- 全国調査と大阪府チャレンジテストの結果より、数学の基礎基本の学力はあり、本事業の一定の成果はあると考える。令和3年度から全国調査の出題傾向が新しくなった。中学1年から全国調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。

【英語】

- 英語では、これまでの知識重視の学力から、知識に「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を加えた統合型の学力が求められるようになった。日ごろの授業では、C-NETの活用、ペアワーク・グループワークなどの学習形態の工夫を行い、主体的なコミュニケーションをはかることを目指している。大阪市英語力調査（GTEC）（対象：中学3年生）を領域別の市比を次に表す。

英語	R3	R4	R5	R6	R7
読むこと	1.07	1.02	1.03	1.02	0.99
聞くこと	1.03	0.98	1.04	1.01	1.00
書くこと	1.07	1.02	1.12	1.00	0.96
話すこと	1.00	1.00	1.07	1.01	0.97

- 大阪府チャレンジテスト（対象：3年、英語）の平均正答率の府比を次に表す。

英語	R1	R3	R4	R5	R6	R7
平均正答率	1.02	1.04	1.04	1.07	0.99	1.02

- 英語の基礎基本の学力はあり、本事業の一定の成果はあると考える。中学1年から大阪市英語力調査が求める学力を着実に段階的に定着させ、中学1年からの定期テストや実力（課題）テストの結果を検証の材料とし、学力UPベース事業を活用していくことが求められる。
- CEFRA1レベル相当以上の英語力を有する中学3年生の割合

	R3	R4	R5	R6	R7
学校	59.8	59.2	64.2	60.4	58.9
大阪市	52.6	55.8	54.3	57.5	60.3

※大阪市では、GTECのトータルスコアの440点以上をCEFR・A1レベル相当以上としている。

### 【無回答率】

- 最後に、全国調査の国語と数学の無回答率を次に表す。

(国語)

無回答率(%)	R1	R3	R4	R5	R6	R7
本校	3.2	6.7	5.8	4.8	4.0	6.4
全国	2.6	4.4	4.3	4.6	3.9	6.7

(数学)

無回答率(%)	R1	R3	R4	R5	R6	R7
本校	7.4	14.2	12.3	9.5	12.8	11.2
全国	7.3	11.2	10.8	9.6	11.3	10.6

- 令和7年度から、「総合的読解力」を中心に課題解決学習を展開した。これまでの「話し合い活動」「表現活動」を充実させ、「読解力」「思考力」「表現力」をつける。課題解決学習の取り組みにおいて培った「答えのない課題に対して、粘り強くあきらめない態度」は、「難しい課題にチャレンジする態度」につながる。このことは今後、無回答率の低さに現れることが期待される。

## 《体力の向上》

- 本校は、部活動の参加率が9割近い。筋力トレーニングは、各自で行うことができるが、柔軟性を高めるストレッチングは、多少の専門性を必要とする。保健体育科の授業では、「柔軟性を活かした身体づくり」に力を入れ、体力向上だけでなく、免疫力の向上をねらっている。
- 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の実技の全国比を次に表す。

### 【男子】

2年生	R3	R4	R5	R6	R7
握力	1.05	1.00	0.97	0.92	1.00
上体起こし	1.12	1.15	1.04	1.15	1.04
長座体前屈	1.01	1.07	0.98	1.02	0.90
反復横とび	1.08	1.08	1.07	1.08	1.00
持久走	—	—	—	—	—
20m シャトルラン	1.06	1.09	1.11	1.09	1.04
<b>50m 走</b>	<b>1.01</b>	<b>1.00</b>	<b>0.99</b>	<b>0.97</b>	<b>1.04</b>
立ち幅とび	1.00	1.04	1.03	1.01	0.98
ハンドボール投げ	1.02	0.96	1.04	1.00	0.97
体力合計点	1.08	1.08	1.05	1.08	0.96

※ 50m 走は 1.00 より小さければ全国平均よりも速く、大きければ遅いことを示す。(タイムは小さいほど早いため) 50m 走の表示例：全国比 0.98 (全国平均より約 2%速い)

### 【女子】

2年生	R3	R4	R5	R6	R7
握力	0.98	0.95	1.01	0.94	1.01
上体起こし	1.00	1.12	1.08	1.15	1.05
長座体前屈	0.99	0.98	0.99	0.99	1.03
反復横とび	1.00	1.06	1.01	0.99	0.98
持久走	—	—	—	—	—
20m シャトルラン	0.94	1.01	1.06	1.05	1.07
<b>50m 走</b>	<b>1.04</b>	<b>1.01</b>	<b>0.99</b>	<b>0.99</b>	<b>1.04</b>
立ち幅とび	0.96	1.03	1.00	0.99	0.98
ハンドボール投げ	0.87	1.01	0.92	0.89	0.89
体力合計点	0.94	1.03	1.02	0.99	0.97

- 令和7年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の実技の結果では、男子は8種目のうち、(4)種目(R6:7種目、R5:6種目、R4:6種目、R3:7種目)が全国平均を上回っていた。令和7年度の同調査で、女子は8種目のうち(4)種目(R6:3種目、R5:6種目、R4:5種目、R3:1種目)が全国平均を上回っていた。

- 前述したように、本校は「柔軟性を活かした身体づくり」に力を入れている。柔軟性は筋肉と腱が伸びる能力のことで、競技パフォーマンスの向上に限らず、障害予防や体力向上などにも関係する。本校では「課題に応じた教育活動推進事業」を活用し、平成26年度から令和7年度にわたって、体操競技が専門の講師が継続して配置されている。その専門分野を活かした「柔軟性を活かした身体づくり」の理論や授業実践などは、保健体育科の指導の手本になっている。
- 令和7年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の生徒質問項目における「Q1.運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか。」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する生徒の割合を次に表す。本校では、「課題に応じた教育活動推進事業」で市費常勤講師の配置（保健体育、TTの指導）をしていただき、きめ細かい指導を継続している。令和8年度もTTによる指導効果を上げ、「運動やスポーツすることが好き」という生徒を増やしていく。

2年生		R3	R4	R5	R6	R7
男子	学校	53.6	61.9	63.2	79.6	72.0
	全国	60.6	62.1	63.4	63.5	66.4
女子	学校	34.9	45.2	33.1	53.5	45.3
	全国	43.0	44.2	43.1	43.2	43.0

- 男子と比較して女子の全国平均を上回る種目が少ない。女子の運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツに対する意識は、全国平均より低かったが、今年度は改善した。今後も継続して取り組んでいく。生涯教育を見据え、中学卒業後も自ら健康管理や体力向上を実践できる生徒の育成を行う。
- 令和7年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の生徒質問項目における「1週間の総運動時間が60分未満の生徒の割合」を次に表す。

2年生		R3	R4	R5	R6	R7
男子	学校	10.2	12.2	13.0	6.8	10.7
	全国	7.4	7、8	11.0	9.2	9.4
女子	学校	32.0	20.5	26.3	31.0	27.7
	全国	17.8	17.9	24.9	21.4	21.4

- 定期的に発行される「給食だより」では食事による健康管理、「ほけんだより」では基本的な生活習慣の維持による健康管理を、生徒や保護者に伝えてきた。学校ホームページでは、給食のメニューの紹介だけに終わらず、季節の食べ物の紹介、生産者や調理員の思いを給食時間の校内放送でも伝えた。保健室は、感染症対策を行いながらの体調不良や怪我をした生徒への対応を行い、各種検診も行った。担当者による安定した食育指導や保健指導により、安心して教育活動が行うことができている。
- 令和6年度、自己除去が廃止となった。令和8年度より、学校給食食物アレルギー対応システム（つばさ）を導入する。令和8年度も継続して、食物アレルギーに対する理解を教職員並びに保護者とも深め、取り組んでいく。

## 【学びを支える教育環境の充実】

- コロナ禍により、令和2年度～令和3年度は、計画していた集団づくり（人と人が交わり方を学ぶ取り組み）を目的とした行事の多くが縮小または中止となった。校外学習や人権学習や性についての学習など特色ある学習が不十分であった。令和4年度は、感染症対策を講じながら、体育大会や修学旅行、文化発表会、性についての学習などのすべての行事を予定通りに進めることができた。令和5年5月8日に2類感染症から5類感染症に移行し、教育活動は通常通りに行われた。
- 令和5年度から令和6年度にかけて、5類感染症の移行に併せて職員の働き方改革を遂行し、教育課程や行事の見直しを行った。令和6年度から組織・会議の見直しを行い、「健康教育部」を「健康安全部」に改編し、新たに「研究主任」「教育相談コーディネーター」「安全主任」「不登校担当」「総合担当」「特別活動担当」を配置した。令和7年度は「ICT委員会」「文化発表会実行委員会」を部に吸収し、会議を削減した。令和7年度末に総括を行い、令和8年度も引き続き組織・会議の見直しを行う。
- 「深い理解」よりも「とりあえずテストで点をとれるテクニックを教えてしまう」傾向が強くなってきているのではないだろうか。学習は、わからなかったり、できなかったりしたことが、様々な試行錯誤や他者からのアドバイスにより、わかったり、できるようになるという主体的な体験をとまなう。「わかった」「できた」という体験は「喜び」ともない、その「喜び」がさらに学習を進めていくモチベーションになっていく。「テクニック」の傾向が強くなると、モチベーションが失われ、知的好奇心が失われていく。その結果、何とか理解してもらおうと一生懸命説明しても「長い説明はいいからやり方だけ教えて」という残念な反応が返ってくる。いかに「学ぶ喜び」を感じられる授業実践をつくることができるかが鍵となる。
- そのような学びを支援する環境づくりとして、令和4年度はICT機器の活用と整備、教職員の長時間勤務の解消を掲げた。学級担任の業務の軽減をはかるために、副担任をはじめとする全職員に業務を分散している。具体的には、朝と帰りの学活、給食指導、学級活動、道徳の授業を担当だけではなく、副担任もふくめて複数で担当することである。これにより業務が減るだけではなく、精神的な余裕がでてくる。私的な用事（育児、介護、通院、旅行、趣味など）で休暇をとることへのハードルも低くなる。肉体的・精神的な余裕は、次への活力となり、好循環を生み出す。教職員には、業務を全員で取り組むことで、職場に好循環が生み出されることを引き続き理解させていく。「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1および基準2を満たす9月の教員の割合を次に表す。

	R3	R4	R5	R6	R7
基準1	34.48	27.12	31.58	42.59	42.64
基準2	63.79	52.54	73.68	75.93	92.73

- 教職員の長時間勤務の解消を通じ、教員が子どもたちの前で健康で生き生きと働くことができ、子どもたち一人ひとりに向き合う時間を確保することを目指す。さらには、教科の専門性を活かす、そしてその専門性を伸ばす学びを教員一人ひとりに求め、互いの教育実践を交流できる働きがいのある職場環境をつくっていく。令和5年度より、校内研究授業を各学年での実施を再開した。一方、管理作業部、事務部、会計年度職員、サポーターはその教育活動を陰ながら支援していく。
- 令和5年4月、校長は学校グランドデザイン（【学校教育目標】【学校経営の重点】【目指す学校像】【目指す生徒像】）を示し、教職員で共有し、教育活動を推進した。令和5年12月に令和6年度に向けて、学校のすべての業務を見直すために、教職員対象に「業務に関するアンケート」を実施した。令和7年度の評価をもとに、令和8年度の学校運営に活かしていく。

## 大阪市立緑中学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
	C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【安全・安心な教育の推進】(再掲)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査において、不登校生徒の在籍比率を前年度より減少させる。【施策1-2-6】</li> <li>● 年度末の校内調査において、前年度不登校生徒の改善の割合を増加させる。【施策1-2-7】</li> <li>● 年度末の校内調査において、「学校の規則やきまりを守っていますか」に対して、肯定的な「守っている」と回答する割合を生徒は97%以上、保護者は90%以上にする。【施策1-3-8】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を84%以上にする。【施策1-1-1】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「将来の夢や目標をもっていますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を(80)%以上にする。【施策2-2-11】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を(97)%以上にする。【施策2】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を(87)%以上にする。【施策1】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を(82)%以上にする。【施策2】</li> </ul> <p><b>学校独自の目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、対応した割合を100%にし、解消した割合を95%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「緑中学校『情報モラルチェック』」を活用し、スマホの危険性や使い方について理解していますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する割合を(80)%以上にする。【施策1-6-10(関連)】</li> <li>● 年度末の校内調査(保護者)における「学校は安全対策に努めていますか」に対して、肯定的な「努めている」と回答する割合を90%にする。</li> <li>● 年度末の校内調査(保護者)において、「学校の様子はHPや通信等でよくわかりますか」に対して、肯定的な「よくわかる」と回答する割合を90%以上にする。</li> <li>● 防災・減災教育の計画的・継続的な実施を行い、災害発生時に自ら危険を回避するために、主体的に行動する態度及び安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成をはかる。</li> </ul>	B

- 答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進する。
- 文化・芸術・音楽に対する知識理解を深め、感性を高めるための機会を年に1回以上つくる。
- 地域連携の取り組みや多様な体験学習により、生徒の好奇心や探求心を育み、魅力ある学校づくりを推進する。
- 特別支援学級および自校通級指導教室の自立支援及び学習支援の環境整備を行う。

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【1、安心・安全な教育環境の実現】《いじめ対策》〔生活指導部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● いじめへの対応については、「大阪市いじめ対策基本方針」に基づき対処する。</li> <li>● スクールライフノートの相談申告機能や毎月のいじめアンケートなどを活用して、いじめの早期発見と早期対応、早期解消を行う。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、肯定的な「思う」と回答する生徒の割合を95%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、対応した割合を100%にし、解消した割合を95%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査における「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」に対して、肯定的な「守っている」と回答する生徒の割合を95%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査における「スマホの危険性や適切な使い方について理解していますか」に対して、肯定的な「理解している」と回答する生徒の割合を95%以上にする。</li> </ul>	B
<p>取組内容②【1、安心・安全な教育環境の実現】《不登校対策》〔生活指導部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 別室登校や学習者用端末の活用（オンライン授業や Classroom）などにより、登校支援と学習支援を行う。</li> <li>● 全教職員で不登校対応を行う。スクールカウンセラーや鶴見区役所こどもサポートネットなどと連携する。</li> </ul>	B
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査において、令和6年度不登校生徒の改善の割合を増加させる。</li> <li>● 年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的な「思っている」と回答する生徒の割合を（75）%以上にする。</li> </ul>	
<p>取組内容③【1、安心・安全な教育環境の実現】《防災減災教育》〔健康安全部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 学校の実態に合わせた「防災計画」を策定し、防災減災教育を推進する。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年に3回の避難訓練（津波・地震・火災）を行う。</li> <li>● 年度末の校内調査（生徒・保護者）における「あなたは家族で、災害の際の避難方法、連絡の取り方について話し合っていますか」に対して、肯定的な「話し合っている」と回答する生徒の割合を（50）%以上にする。</li> </ul>	B
<p>取組内容④【2、豊かな心の育成】《道徳》〔教務部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進する。</li> </ul>	B
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的</li> </ul>	

<p>な「取り組んでいます」と回答する割合を80%以上にする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「道徳の授業では、自分と違う意見について考えるのは楽しいですか」に対して、肯定的な「楽しい」と回答する割合を80%以上にする。</li> </ul>	
<p>取組内容⑤【2、豊かな心の育成】《キャリア教育》〔教務部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒の実態に合わせた「キャリア教育全体計画」を策定し、キャリア教育を推進する。</li> <li>● 職業講話・職場見学・職場体験等、職業に関連したキャリア教育を実施する。</li> <li>● キャリアパスポートを適切に活用する。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「将来の夢や目標を持っていますか」に対して、肯定的な「持っています」と回答する割合を65%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して、肯定的な「思います」と回答する割合を90%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的な「思っている」と回答する割合を75%以上にする。</li> </ul>	B
<p>取組内容⑥【2、豊かな心の育成】《特別支援教育》〔特別支援教育委員会〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 環境整備や支援方法を考慮し、個別対応する。</li> <li>● 過剰な支援ではなく、最小限の生徒支援により、卒業後に自立した学校生活を送られるようにする。</li> <li>● 自分の良さを知り、自己肯定感を高めさせる。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 連絡帳を使用するなど家庭連絡や保護者・教師間での連携を密にし、生徒の支援体制の改善をはかる。</li> <li>● 提出物や課題などのサポートを行う。行事や取り組みに積極的に参加し、学校生活で失敗を恐れずに行動させる。</li> <li>● 学校評価アンケート(生徒用)において【自分には良いところがあると思う】の項目について75%以上の肯定的回答を目指す。</li> </ul>	B
<p>取組内容⑦【2、豊かな心の育成】《芸術鑑賞》〔教務部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 芸術鑑賞や合唱等の取り組みを各学年、年1回以上実施する。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査(保護者・生徒)における「文化的行事は充実していますか」に対して、肯定的な「充実している」の回答の割合を80%以上にする。</li> </ul>	A

## 【中期目標の達成状況】

1. 年度末の校内調査（生徒）における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を84%以上にする。

R4	R5	R6	R7
87.4	83.5	81.9	82.0

2. 校内調査において、不登校生徒の在籍比率を前年度より減少させる。

### 【1学期末】

学年		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	8	6	7	7	3
	在籍比率	2.7	2.2	2.7	2.4	1.1
2年	人数	24	15	9	6	16
	在籍比率	8.1	5.1	3.3	2.3	5.4
3年	人数	17	32	24	7	7
	在籍比率	6.3	10.7	8.2	2.5	2.7

### 【2学期末】

学年		R3	R4	R5	R6	R7
1年	人数	—	10	13	11	13
	在籍比率		3.6	5.1	3.8	5.1
2年	人数	—	18	15	11	18
	在籍比率		6.1	5.4	4.3	6.2
3年	人数	—	32	24	12	16
	在籍比率		10.7	8.2	4.3	6.2

3. 校内調査において、前年度不登校生徒の改善の割合を、毎年、増加させる。

	前年度人数	改善した人数	改善の割合(%)
R7			
R6	29	12	41.4
R5	37	19	51.4
R4	57	6	10.5
R3	39	9	23.1

※ 「学校カルテ」より

※ 不登校の改善の割合は、前年度不登校であった児童生徒のうち、不登校の状態が改善された、または不登校状態であっても、総合的な判断により、不登校の状態が改善されたとする人数の割合を示している。

4. 年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて、対応した割合を 100% にし、解消した割合を 95% 以上にする。

	R4	R5	R6	R7
対応	100	100	100	100
解消	100	100	100	95

5. 年度末の校内調査における「学校の規則やきまりを守っていますか」に対して、肯定的な「守っている」と回答する割合を生徒は 95% 以上、保護者は 90% 以上にする。

	R4	R5	R6	R7
生徒	98.2	98.2	97.6	97.3
保護者	96.2	97.3	97.0	97.6

6. 年度末の校内調査（保護者）における「学校は安全対策に努めていますか」に対して、肯定的な「努めている」と回答する割合を 90% にする。

R4	R5	R6	R7
93.9	92.9	92.6	95.6

7. 年度末の校内調査（保護者）における「学校の様子はHPや通信等でよくわかりますか」に対して、肯定的な「よくわかる」と回答する割合を 90% 以上にする。

R4	R5	R6	R7
90.7	88.8	88.3	85.9

8. 防災・減災教育の計画的・継続的な実施を行い、災害発生時に自ら危険を回避するために、主体的に行動する態度及び安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成を図る。

⇒避難訓練実施日

令和7年 6月30日（月）…地震

令和7年11月21日（金）…火災

令和8年 3月18日（水）…地震

9. 答えがない道徳的な課題を一人ひとりが自分自身の問題ととらえ、向き合う、「考え、議論する道徳」の授業を充実させるための研究を推進する。

- 令和4年度文部科学省「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」道徳教育研究校

授業日：令和4年11月25日（金）

- 令和5年度は、令和4年度の研究授業担当者6名が道徳教育推進の核となり、授業実践が広がっている。

- 令和6年度は、大阪府公立学校対象に公開研究授業を開催した。  
授業日：令和6年9月30日（月）

10. 文化・芸術・音楽に対する知識理解を深め、感性を高めるための機会（芸術鑑賞会等）を年に1回以上つくる。

	芸術鑑賞会	実施日
R7	演劇（パントマイム）	令和7年10月31日(金)
R6	音楽（ジャズ）	令和6年11月22日(金)
R5	古典（落語）	令和5年11月17日(金)
R4	演劇	令和5年2月27日(月)

11. 地域連携の取り組みや多様な体験学習により、生徒の好奇心や探求心を育み、魅力ある学校づくりを推進する。

	体験学習	実施日
R7	2年校外学習（大阪市周遊）	令和7年11月13日(木)
R6	2年校外学習（大阪市周遊）	令和6年11月15日(金)
R5	2年校外学習（大阪市周遊）	令和5年11月16日(木)
R4	2年校外学習（大阪市周遊）	令和4年11月10日(木)

12. 特別支援学級の自立支援及び学習支援の環境整備を行う。

⇒令和4年度より順次、環境整備を実施している。予算はブロック予算を活用している。

## 【年度目標の達成状況】

### 取組内容① 《いじめ対策》

- いじめアンケートや相談申告機能を活用しいじめを早期に発見し対応している。  
1学期末に実施された学校アンケートでは「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」に対しての肯定的な回答の割合が94.4%だったので継続して取り組みを行い年度末のアンケートでは95%以上になるようにしていきたい。

### 取組内容② 《不登校対策》

- 図書館での対応やカウンセリング、家庭訪問などを個々の状況に応じて行っている。今後も全職員で取り組み不登校生や登校しにくい生徒のサポートを行っていく。

### 取組内容③ 《防災減災教育》

- 年間計画通りに避難訓練を実施できている。訓練の意義や方法についても抜本的に見直し、より意義のある訓練にしていくよう改善を行っていく。
- 年度末調査は未実施ではある。

### 取組内容④ 《道徳》

- 各学年で計画通りに実施している。
- 生徒自身で読み込むことを目的に、4人グループで輪読、テーマに沿った内容をグループで聞きあい、クラス全体に共有するなどの方法を推進する。

### 取組内容⑤ 《キャリア教育・職業講話》

- キャリアパスポートを適切な時期に配布、記入し活用している。
- 1学期に3年生で高校出前授業、2年生で職業講話を実施。2学期に1年生で、各生徒の保護者から職業についての聞き取りを行い、全体発表を行った。

### 取組内容⑥ 《特別支援教育》

- 連絡帳や電話連絡等で保護者との連絡を細かく取り、教職員間で情報共有・連携し、常に支援体制の改善をはかってきた。
- テスト前などは放課後に学習指導を行い、課題を期限までに出せるよう取り組んだ。またテスト対策や質問を受け付けるなど、生徒に寄り添った支援を心掛けた。
- 夏休みや冬休みにおける長期休暇で補充学習を行い、課題を期限までに提出できるよう取り組んだ。また必要に応じて個別の声掛けを行い、学習状況を判断して生徒に寄り添った支援を心掛けた。
- 学校行事や学年の取り組みでは、特別支援学級在籍生徒が意欲的に参加できるよう支援し、特別支援学級在籍生徒だけでなく、通級指導教室やその他支援を必要とする生徒の支援を積極的に行った。
- 1学期の学校評価アンケート（生徒用）において【自分には良いところがあると思う】の項目での肯定的回答は88.1%だった。後半も引き続き、より自己肯定感が高まるよう継続して指導していきたい。

### 取組内容⑦ 《芸術鑑賞》

- 10月31日（金）に演劇（パントマイム）を鑑賞した。
- 2年生は10月23日に合唱コンクールを実施した。1年生は3学期（3月16日）に実施予定。

## 次年度への改善点

### 取組内容① 《いじめ対策》

- いじめアンケートや相談申告機能を活用しいじめを早期に発見し対応できるようにする。
- 1学期末に実施された学校アンケートでは「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対する肯定的な回答の割合が95%だったので継続して取り組みを行い、来年度のアンケートでも95%を越えられるようにしていきたい。

### 取組内容② 《不登校対策》

- 別室対応やカウンセリング、家庭訪問などを粘り強く行えている。今後も全職員で取り組み少しでも不登校生のサポートを行い、登校できる生徒を増やしていきたい。
- 不登校生の割合を全国平均（文部科学省）を下回るように働きかけていく。

### 取組内容③ 《防災減災教育》

- 外部講師による防災講話や、消防署や外部の有識者による本校の避難訓練の検証、また教職員対象に学校防災についての研修の機会などは、生徒及び教職員の防災意識の向上に有効だった。

### 取組内容④ 《道徳》

- 生徒自身で読み込むことを目的に、4人グループで輪読、テーマに沿った内容をグループで聞きあい、クラス全体に共有するなどの方法を推進した。生徒自身が考えを深めやすい形になった。

### 取組内容⑤ 《キャリア教育・2年職業講話》

- キャリアパスポートを各学期末に書かせ、自己の振り返りを行う。
- OENを活用し、1回は職業講和を開催する。
- 3年生では、社会人マナーとして「面接講座」を興国高校と連携し開催する。

### 取組内容⑥ 《特別支援教育》

- 2学期最終の学校評価アンケート（生徒用）において【自分には良いところがあると思う】の項目での肯定的回答は85.1%だった。来年度も引き続き、特別支援在籍生徒を中心に他の支援を必要とする生徒の支援も行い、学校全体で自己肯定感の向上ができるよう支援を続けていく。
- 連絡帳、家庭連絡、家庭訪問など保護者・教師間での連携を密にし、生徒の支援体制の改善に努めることができた。来年度も引き続き、生徒、保護者間での連絡を密に行っていく。
- 提出物が出せなかったり、自信がなくテストを欠席する生徒や自己表現が難しい生徒がいたので、支援の強化、家庭への協力を求め、生徒が前向きに取り組める課題の提供が必要だと感じた。

取組内容⑦ 《芸術鑑賞》

- 年度末の校内調査（保護者・生徒）における「文化的行事は充実していますか」に対して、肯定的な「充実している」の回答の割合は91.8%だった。
- 今年度は演劇を鑑賞した。全学年を入れての1回公演だと、後ろの方が見にくくなってしまっているので2回公演が望ましい。
- 予算、演目の性質も考慮しながら公演の回数を検討していきたい。

## 大阪市立緑中学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準	A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
	C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】 (再掲)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 大阪市英語力調査におけるCEFR A1レベル(英検3級)相当以上の英語力を有する中学3年生の割合(4技能)を<u>60</u>%以上にする。【施策4】</li> <li>● 年度末の校内調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、<u>最も</u>肯定的な「好き」を回答する生徒の割合を<u>45</u>%以上にする。【施策5-1-16】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、<u>最も</u>肯定的な「当てはまる」と回答する割合を(45)%以上にする。【施策4-2-13】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「朝食を毎日食べていますか」に対して、肯定的に回答する割合を(93)%以上にする。【施策5-2-18】</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「毎日、同じくらいの時刻に寝て、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して、肯定的に回答する割合を(87)%以上にする。【施策5-2-18】</li> </ul> <p><b>学校独自の目標</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「読解力」の育成を推進する。</li> <li>● 校内研究授業を年3回(各学年1回)実施し、「主体的な深い学び」についての研究を行う。</li> <li>● 年度末の校内調査における「学校の授業はわかりやすいですか」に対して、肯定的な「わかりやすい」と回答する生徒の割合を<u>90</u>%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査(生徒)における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的な「取り組んでいる」と回答する割合を<u>70</u>%以上にする。</li> </ul>	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【4、誰一人取り残さない学力の向上】《国語科》</p> <p>短歌・俳句・詩・作文等の創作活動により、表現力、書く力を育成する。漢字・語句・文法事項などの反復練習を行い、小テストを実施することで基礎学力の定着、向上をはかる。</p> <p>指標</p> <p>自分の意見を発表する機会を増やす。小テストを行い、平均点7割以上を目指す。また、ノートやファイルの点検を年間5回以上行い、学習状況を把握する。</p>	B
<p>取組内容②【4、誰一人取り残さない学力の向上】《社会科》</p> <p>基礎基本の定着を図りつつ、個々の生徒に応じた思考力・資料活用能力を伸ばさせる。</p> <p>指標</p> <p>定期テストでの各観点別出題で、平均正答率を50%以上にする。</p>	B
<p>取組内容③【4、誰一人取り残さない学力の向上】《数学科》</p> <p>プリントなどで反復練習、振り返り学習を行い、基礎学力の定着をはかる。習熟度別、少人数などの分割授業やグループ学習を取り入れ、生徒が主体的に学習し、理解しやすい指導に努める。また、ICT機器の活用をすすめる。</p> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 1単元で1回以上、小テストや練習プリントを行う。</li> <li>● 定期テストの間違い直しを行う。</li> <li>● 定期テストごとに1回以上ノート点検を行い、家庭学習を含めた指導をする。</li> </ul>	B
<p>取組内容④【4、誰一人取り残さない学力の向上】《理科》</p> <p>科学現象を実際に感じられるよう、できるかぎり多くの実験を行う。学習教材を用いて、基礎学力の定着、向上をはかる。また、ICT機器を用いて視覚・聴覚に訴えかけるような教材提示を適宜行う。</p> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 提出物の提出率80%以上を目指す。</li> <li>● 定期テスト20点未満を全体の10～15%未満を目指す。</li> </ul>	B
<p>取組内容⑤【4、誰一人取り残さない学力の向上】《音楽科》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 基礎・基本の定着を図り、合唱や器楽を通して豊かな感性を育てる。</li> <li>● 合唱では、パートリーダーを中心とした活動ができるよう指導する。</li> <li>● ICT機器を活用し、興味、関心が持てる教材を精選する。</li> </ul> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各学期に小テスト、聴き取りテスト、確認テスト・実技テストを行い授業内容の定着をはかる。</li> <li>● 提出物（プリント・ノート）の提出率を85%以上にする。</li> </ul>	B

<p>取組内容⑥【4、誰一人取り残さない学力の向上】《美術科》</p> <p>ICTを活用し学習の定着をはかるとともに、話し合い学習を通じて理解を深めていく。</p>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 授業準備を徹底させ、規律ある指導を行う。</li> <li>● 学期に1回以上、スケッチブック・ファイルの点検を行い学習状況を把握する。</li> <li>● 授業内にテストを行い授業内容の定着をはかる。</li> </ul>	B
<p>取組内容⑦【5、健やかな体の育成】《保健体育科》</p> <p>日々の授業において、集団行動を徹底させ、基本的な生活習慣や基礎的な学習態度が定着するように努め、基礎体力の向上をはかる。また、自身の体や体力について関心を持たせるようにICT機器の活用機会を前年度よりも増加させる。</p>	B
<p>指標</p> <p>新体力テストの学校平均ポイントが、男女とも6項目において全国平均を上回る。</p>	
<p>取組内容⑧【4、誰一人取り残さない学力の向上】《技術家庭科》</p> <p>製作経験の少ない傾向があるので説明はICTなどを使用し、イメージしやすくなるよう工夫する。実習は班行動を中心にを行い、ともに学びあう授業作りを行う。実習では衛生面や怪我などの安全面に配慮し、基礎的・基本的な技術を身につけさせる。</p>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 実習の時間を全体の授業時間の70%以上取り入れ、生活に役立てるように授業計画を立てる。</li> <li>● 実技テストを行い、基礎内容の定着をはかる。</li> <li>● 定期テストで20%未満を全体の10%以下になるよう学習内容の定着をはかる。</li> </ul>	B
<p>取組内容⑨【4、誰一人取り残さない学力の向上】《英語科》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 英語の学習を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、言語や文化に対する理解を深める。</li> <li>● 教授法を工夫し、すべての生徒が基礎的・基本的な内容を身につける。</li> <li>● 教科書の内容理解を4skills(「読む」「聞く」「話す」「書く」)の4領域の活動を通して行い、英語でのコミュニケーション能力の基礎を養う。</li> </ul>	
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各単元に1回以上は既習の単語や文法の小テストを行い、学習内容の確認・定着をはかる。</li> <li>● 「チャレンジテスト」が府の平均以上となるように、また、大阪市英語力調査(GTEC)が市の平均以上となるように、学力向上を目指す。</li> <li>● 定期テストの20点未満が全体の10%～15%以下になるよう基礎的・基本的な内容についての指導を十分に行う。</li> </ul>	B

<p>取組内容⑩【4、誰一人取り残さない学力の向上】《総合》〔教務部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 校内外における体験的な学習の取り組み等を通して、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動を行う。</li> </ul>	B
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査（生徒）における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的な「取り組んでいる」と回答する割合を70%以上にする。</li> </ul>	
<p>取組内容⑪【5、健やかな体の育成】《健康教育・保健室》〔健康安全部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒の実態に合わせた「学校保健計画」を策定し、健康教育を推進する。</li> <li>● 生徒が規則正しい生活習慣を身に付け、心身ともに健康な学校生活を送ることができる環境の実現をめざす。</li> </ul>	B
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査（生徒）における「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」に対して、肯定的な「寝ている」と回答する割合を（80）%以上にする。</li> <li>● 年度末の校内調査（生徒）における「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して、肯定的な「起きている」と回答する割合を（90）%以上にする。</li> </ul>	
<p>取組内容⑫【5、健やかな体の育成】《食育》〔健康安全部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒の実態に合わせた「食に関する指導の全体計画」を策定し、食育を推進する。</li> <li>● 食育とアレルギー対応の校内研修を年度初めに実施する。</li> </ul>	B
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 年度末の校内調査（生徒）における「給食は残さず(減らさず)に食べていますか」に対して、「食べている」と回答する割合を前年度(55.7%)上回るようにする。</li> </ul>	

## 【中期目標の達成状況】

1. 令和7年度の年度末の校内調査における「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する生徒の割合を80%以上にする。

	R4	R5	R6	R7
学校	63.1	84.4	83.9	82.2
全国	78.7	79.7	86.1	84.7

2. 令和7年度の大阪市英語力調査におけるCEFR A1レベル（英検3級）相当以上の英語力を有する中学3年生の割合（4技能）を60%以上にする。

	R3	R4	R5	R6	R7
学校	59.8	59.2	64.2	60.4	58.9
大阪市	52.6	55.8	54.3	57.5	60.3

3. 令和7年度の年度末の校内調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する生徒の割合を80%以上にする。

2年生		R3	R4	R5	R6	R7
男子	学校	53.6	61.9	63.2	79.6	72.0
	全国	60.6	62.1	63.4	63.5	66.4
女子	学校	34.9	45.2	33.1	53.5	45.3
	全国	43.0	44.2	43.1	43.2	43.0

4. 令和7年度の年度末の校内調査（生徒）における「学校の授業はわかりやすいですか」に対して、肯定的な「わかりやすい」と回答する割合を80%以上にする。

R4	R5	R6	R7
92.5	90.1	88.4	88.0

5. 令和7年度の年度末の校内調査（生徒）における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対して、肯定的な「取り組んでいる」と回答する割合を80%以上にする。

R4	R5	R6	R7
77.7	71.8	71.6	77.2

## 【年度目標の達成状況】

### 取組内容①《国語科》

- 漢字や文法、古文など、定期テスト以外に小テストを実施し、基礎学力の定着を進めている。また、創作活動や班学習などを通して、思考力、表現力の育成を進めている。

### 取組内容②《社会科》

- 定期テスト以外に単元ごとの小テストで基礎基本の定着を進め、話し合い活動では個々の生徒に応じた思考力・資料活用能力の育成に向け、取り組んでいる。

### 取組内容③《数学科》

- グループ学習などを取り入れ、話し合うことでより主体的で深い学びにつながることを目指し、日々取り組んでいる。
- 小單元ごとにドリルプリントやスタディサプリなどを活用し、習熟をはかっている。また、小テストの実施や各定期テストで問題集・ノート点検を行い、生徒の理解の状況把握している。

### 取組内容④《理科》

- 科学現象を実際に感じられるよう、多くの実験を行っている。また、ICT機器等を用いて視覚・聴覚に訴えかけながら基礎学力の定着、向上をはかっている。

### 取組内容⑤《音楽科》

- 2・3年生は合唱コンクール、文化発表会に向けてパートリーダー、指揮者を中心に意欲的に取り組んだ。1年生は2学期に班活動で箏の実習を行い、主体的に取り組むことができた。

### 取組内容⑥《美術科》

- 学習者端末を使用し、制作の資料に活用できている。定期テストを実施し、学習の定着を図った。
- グループワークを行い、話し合い活動を進めることができた。

#### 取組内容⑦《保健体育科》

- どの学年も規律高い授業を行うことができている。新体力テストの結果はまだ届いていないが、例年よりごくわずかに低いくらいの平均値が出ている。ICTの使用頻度を上げることができた。

#### 取組内容⑧《技術家庭科》

- 製作経験の少ない傾向があるので説明はICTなどを使用し、イメージしやすくなるよう工夫している。実習は班行動を中心に行い、ともに学びあう授業づくりを行っている。実習では衛生面や怪我などの安全面に配慮し、基礎的・基本的な技術を身につけさせている。

#### 取組内容⑨《英語科》

- 単語テスト等の小テストを各単元3回以上は実施し、基礎学力の定着に努めている。
- C-NETの授業やスピーキングテスト等、4技能を総合的に活用する発展的な内容に取り組んでいる。
- 定期テストの20点未満が全体の10%以下を達成することができた。

#### 取組内容⑩《総合》〔教務部〕

- 修学旅行、校外学習など行事に向けての調べ学習を実施。

#### 取組内容⑪《健康教育・保健室》

- 学校保健計画に基づき、生徒が心身ともに健康な学校生活を送ることができるよう、定期健康診断や環境衛生検査等の保健管理、性教育やがん教育等の保健教育を行った。  
また、規則正しい生活習慣の重要性を感じることができるよう、ほけんだよりの発行や掲示物での啓発、生徒保健委員会での活動等、積極的に取り組むことができた。
- 二学期末の校内調査（生徒）において「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」に対して肯定的な回答をする割合は89.5%、「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」に対して肯定的な回答をする割合は94.2%で、目標を達成することができた。

#### 取組内容⑫《食育》

- 毎日の給食時間の放送で、給食メニューだけでなく、旬の食材や調理員への関心が高まるよう取り組んだ。食育つうしんを毎月配布し、家庭への啓発をすすめている。
- 1学期の学校評価アンケートでは、「給食は残さず（減らさず）に食べていますか」に対して、「食べている」と回答する割合が65.6%で前年度（59.1%）を上回っている。2回目の評価アンケートでも更にポイントが上がるよう、継続して取り組む。

## 次年度への改善点

### 取組内容①《国語科》

- 文章を読み解く中で生徒の学びが深まるように発問や授業の形態を考える。主体的・協同的な学びに繋げるために、言語活動を工夫し、ICT 機器を活用する場面も増やしていく。

### 取組内容②《社会科》

- 定期テストでの平均正答率は 50%を超えるようになったが、思考力・資料活用力を問う問題での正答率は 50%を超えないことが多い。日々の授業の中でワークシートを使った論述や発表、協働学習を行うなど、工夫が必要である。

### 取組内容③《数学科》

- 知識・理解を問う問題の正答率は上がっているものの、思考・判断を問う問題の正答率は伸びに欠けている。グループ学習などで自分考えを言語化し、具体的事象を抽象化する練習を積み重ねる必要がある。

### 取組内容④《理科》

- 科学現象を実際に感じられるよう、多くの実験を行っている。
- 定期テスト 20 点未満の生徒は最も低いときで 0%、最も高いときで 7%であった。
- 提出物は 90%以上の割合で提出できているが、未提出者には偏りがある傾向が見られた。

### 取組内容⑤《音楽科》

- 器楽演奏や和楽器演奏、合唱コンクールの練習などのグループワークにより、主体的・協働的に活動はできたが、ICT 機器の活用が少なかった。自身の演奏などを録音するなど ICT 機器を積極的に活用していきたい。また、引き続き毎学期実技テストや聴き取りテストなどを用いて学習の定着をはかっていく。

### 取組内容⑥《美術科》

- グループワークにより、互いを認め表現方法を工夫する姿が多く見受けられた。生徒の活動に迷いや無駄な時間を設けず、わかりやすい指示に努めていきたい。ICT 機器の活用も変わらず進めていきたい。引き続き定期テストの実施を行い、学力の定着をはかっていく。

### 取組内容⑦《保健体育科》

- 全国体力調査の結果において、男子は全国平均を 2 項目上回り、女子は全国平均を 4 項目上回った。男女とも、課題としていた「投げる力」である「ハンドボール投げ」では全国平均に及ばなかった。もう一つの課題である「握力」については、男女ともに全国平均と同等の数値であった。また「全身持久力」である「20mシャトルラン」の数値が男女とも全国平均を大きく上回った。日々の授業において、「持久力」「筋力」の向上を目指し、補強運動を多く取り入れ、総合的な体力向上を目指す工夫をしていきたい。

#### 取組内容⑧ 《技術家庭科》

- 実習の時間を全体の授業時間の70%以上取り入れ、生活に役立てるように授業計画を立て実行できた。
- 実技テストを行い、基礎内容の定着をはかることができた。
- 定期テストで20%未満を全体の10%以下になるよう学習内容の定着を図った。
- 家庭科においては調理実習を行い、安全面・衛生面においても問題なく行うことができた。

#### 取組内容⑨ 《英語科》

- 単語や文法の小テストを継続的に実施し、基礎・基本の確実な定着をはかる。特に、学習につまずきのある生徒への早期支援を充実させ、定期テストの低得点者を減少させる。また、4技能を意識した授業改善を行い、チャレンジテストやGTECの結果を指導に活かしながら、英語力全体の向上を目指す。

#### 取組内容⑩ 《総合》〔教務部〕

- 年度末の校内調査（生徒）における「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」に対する、肯定的な「取り組んでいる」と回答割合は77.2%以上だった。
- 生徒自身が主体となるように事前学習、事後学習を進めていきたい。

#### 取組内容⑪ 《健康教育・保健室》

- 学校保健計画に基づき、定期健康診断や環境衛生検査等の保健管理について、これまで通り適正におこない、性教育やがん教育等の保健教育についてはより充実した内容にできるよう検討していきたい。
- ほけんだよりの発行や掲示物での啓発、生徒保健委員会での活動をより連携させ、取り組んでいきたい。

#### 取組内容⑫ 《食育》

- 食に関する全体計画に基づき、給食の時間はもとより、各教科など学校教育全体の場での食育を全教職員で進めていく。
- 給食時間の放送については、内容を向上して継続する。食育の日の放送や時期に応じた集会発表など、保健委員会生徒を通じた啓発活動も行いたい。
- 食物アレルギーについては誤食誤配を起こさない仕組みを作り、全教職員で取り組む。年度当初にアレルギー対応研修会を開き、共通理解をはかる。

## 大阪市立緑中学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準	A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
	C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p><b>【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】 (再掲)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の<b>40%</b>以上にする。ただし、学校行事などICT活用が適さない日数を除く。<b>【施策6】</b></li> <li>「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1と基準2を満たす教員の割合をそれぞれ<b>30%</b>、<b>60%</b>以上にする。<b>【施策7】</b></li> </ul> <p>学校独自の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>感染症による臨時休業や登校不安、不登校生徒の学びの保障として、自宅でのオンライン学習の環境整備を行い、オンラインでの授業実践の研究を行う。</li> <li>学習者用端末およびルータの管理（定期的な台数調査、修理依頼など）を徹底する。</li> </ul>	<b>B</b>

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容① <b>【6、教育DX (デジタルトランスフォーメーション) の推進】</b>《情報》〔教務部〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オンライン学習の環境整備を行い、オンラインでの授業実践の研究を行う。</li> <li>校内研修で、学習用端末を活用した研究授業（オンライン授業をふくむ）を行う。</li> </ul> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年度末の校内調査（生徒）における「授業で、コンピュータなどのICTをどの程度使用しましたか」に対して、肯定的に回答する割合をそれぞれ全国平均水準に近づける。</li> <li>校内研修で、学習用端末を活用した研究授業（オンライン授業をふくむ）を年に1回以上実施する。</li> </ul>	<b>B</b>
<p>取組内容② <b>【7、人材の確保・育成としなやかな組織づくり】</b>《働き方改革》〔管理職〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学級担任の業務の軽減をはかるために、副担任をはじめとする全職員に業務を分散する。</li> </ul> <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1（基準2）を満たす教員の割合を<b>40%</b>（<b>65%</b>）以上にする。</li> </ul>	<b>B</b>

## 【中期目標の達成状況】

1. 令和7年度の授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。ただし、学校行事などICT活用が適さない日数を除く。

	R5	R6	R7
日数	—	1	3

※ 生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数

2. 令和7年度の「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1と基準2を満たす教員の割合をそれぞれ28%、45%以上にする。

教員の時間外勤務時間上限基準の達成率（9月）

	R3	R4	R5	R6	R7
基準1	34.48	27.12	31.58	42.59	42.64
基準2	63.79	52.54	73.68	75.93	92.73

## 【年度目標の達成状況】

取組内容①《情報》〔教務部〕

- 指標である年一回以上の学習者用端末を利用した研究授業は行うことができている。
- 全校生徒に学習者用端末を貸与することができており、授業や学活、連絡などで活用できるようになっている。

取組内容②《働き方改革》〔管理職〕

- 本校では担任業務の負担解消のために、副担任が学級活動や給食の対応、欠席者連絡の対応、遅刻の対応、保健室の来室生徒の対応、保護者対応など多くの場面で担任を支えている。緑中学校が他校に誇れる取り組みの一つである。「職員室だより」を不定期で発行し、生徒指導や学級集団づくり、不登校対応の理論・考え方を学び、共通理解をはかり、仕事の質を見直す機会をつくっている。教職員の負担軽減および長時間勤務解消のため、欠席連絡アプリおよび採点支援システムの導入により、長時間勤務が令和4年度から少しずつ解消している。

教員の時間外勤務時間上限基準の達成率（9月）

	R3	R4	R5	R6	R7
基準1	34.48	27.12	31.58	42.59	42.64
基準2	63.79	52.54	73.68	75.93	92.73

**【基準1】**

次のア及びイの基準を満たすこと

- ア 1か月の時間外勤務時間が45時間を超えないようにすること
- イ 1年間の時間外勤務時間が360時間を超えないようにすること

**【基準2】**

基準1を原則としつつ、基準1を超えて勤務する場合においても、次のアからエまでの基準を満たすこと

- オ 1年間の時間外勤務時間が720時間を超えないようにすること
- カ 1か月の時間外勤務時間が45時間を超える月を1年間に6月までとすること
- キ 1か月の時間外勤務時間が100時間を超えないようにすること
- ク 連続する複数月（2か月、3か月、4か月、5か月、6か月）のそれぞれの期間について、時間外勤務時間の1か月当たりの平均が80時間を超えないようにすること

## 次年度への改善点

### 取組内容①《情報》〔教務部〕

- 生徒の学習者用端末の使用に状況において、アンケート類や道徳、総合的な学習で調べ学習などでは使用できているが、生徒が学習者用端末を用いて各教科の授業を受けることは多くはなかった。デジタル教科書や Google Classroom・Microsoft Teams・Canva の機能を活用して共同編集を利用した授業実践は一部教員に止まっているため、「学習動画コンテンツ配信事業」のアプリなど使いやすいものから、教員が活用していくための研修をしなければならない。

### 取組内容②《働き方改革》〔管理職〕

- 本校では担任業務の負担解消のために、副担任が学級活動や給食の対応、保護者対応など多くの場面で担任を支えている。これは緑中学校が他校に誇れる取り組みの一つである。令和5年に教職員の負担軽減および長時間勤務解消のため、欠席連絡アプリおよび採点支援システムを導入している。令和6年度は組織改革を行い、「一人一役一改革」をスローガンに業務の見直しを行った。新しい役職も配置した。会議も統廃合した。令和8年度は令和7年度までの組織改革がどうだったのかを考察し、職員の提案にも耳を傾けながら、業務見直し推進していく。